

ポスト体験時代の記憶の継承
—アジア地域史の視座からの共振する戦争・戦後体験—

研究代表者：三好恵真子(大阪大学大学院人間科学研究科・教授)

共同研究者：許衛東(大阪大学大学院経済学研究科・教授)

研究協力者：吉成哲平(大阪大学大学院人間科学研究科・特任助教)

王石諾(名古屋大学学生支援本部・学術専門職)

1. はじめに

2024年のノーベル平和賞に、核兵器のない世界を目指しながら被爆者の救済や証言活動を続けてきた「日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）」が選ばれた。深い苦しみを抱え続けながら、長きにわたるその地道な活動に込められた「平和への希求」が、まさに報われる瞬間でもあった。その一方で、今もなお続くウクライナ侵攻と激しい戦闘が展開されるパレスチナ情勢を目の当たりにしつつ、常に戦いの犠牲となるのは、日常を生きる市井の人々であり、それは広島、長崎への原爆投下や、激しい地上戦が展開された沖縄戦が伝える戦時期の日本の歴史を我々に改めて想起させることにもなった。周知の通り、2025年で戦後80年を迎え、風化が進みゆくこれらアジア・太平洋戦争を巡る体験と記憶は、戦争体験者の高齢化や逝去に伴い、その直接的な証言が聞き取れなくなる「ポスト体験の時代」（上野 2022）へと突入しつつある今日、未来世代への継承が喫緊の課題となっている。同時に、平和主義、民主主義、基本的人権等の戦後的価値により支えられながら、敗戦からの急速な復興と高度成長を遂げた1970年前後から半世紀という節目に際し、戦傷病者や公害被害者、在日外国人を始め、経済的繁栄の物語としての既存の戦後史からは見過ごされがちであった人びとが、暮らしの中で直面してきた現実を、「戦後日本」だけに留まらず、近現代の東アジアが経験してきた歴史の文脈の中に位置付け直しつつ、今日への連続性を問い直す必要性も浮かび上がる。すなわち、アジア・太平洋戦争の遂行を通じて総力戦体制を構築した日本社会は、敗戦後も国民主義へ人びとを動員すると共に、東アジアにおける日本の帝国主義的支配が終焉を迎えながらも、引き続き冷戦体制下でアメリカの新たな植民地主義が継続する時代へと歩んでおり、実に戦後史は、「戦時」からの連続性の中で展開されてきたのである（中野 2005；屋嘉比 2009）。加えて、冷戦下の東アジアでは、朝鮮半島やベトナムを筆頭に度重なる戦争が勃発し、さらには、依然として現在も「継続する冷戦状況」に規定され続けているにも関わらず、戦後日本社会においてこれらの戦争は忘却されたままであること（石原 2022）に鑑みるならば、「戦後」という枠組み自体も、それが立脚する「日本」という閉じられた領域を越えて、重層的に問い直すことが求められていることは間違いない。

このような動向を踏まえつつ、これまで歴史学や社会学の領域を中心に「記憶の歴史化」に光を当て、歴史叙述では見ることのできなかったあるいは見過ごされてきた側面

に注目し、新しい視座から歴史を見直そうとする試みがなされてきた。筆者らは、そうした文脈に沿いつつも、戦後の東アジア地域秩序の再編のなかで、複層的な世界を人々が生きる地域の歴史や記憶を読み解くために、従来のように国家の枠組みから捉えるのみならず、そこから捉えきれない内実こそ、目を向ける必要性があると考えてきた。

そこで、これまで、次世代を担う学生たちの主体性に期待しつつ、戦争・戦後体験の意味を問い、未来への展望を描いていくために、2023年より大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター・IMPACTオープンプロジェクトとして「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ(記憶の継承ラボ)」¹を展開してきた。この「記憶の継承ラボ」では、長崎、沖縄、福島、水俣などの各地において平和活動に尽力する現場の実践者たちとの交流活動を通じて、国境を越えた対話(グローバル・ダイアログ)とその連帯への可能性を生活の次元から模索することを目指している。そしてその根底には、第二次世界大戦後の東アジア地域秩序の再編による歴史の重層性を踏まえつつ有志の教員により2007年設立された「大阪大学中国文化フォーラム」の精神²が受け継がれている。すなわち、東アジア地域秩序に関わる諸課題は、従来の国家間関係のもとではもはや解決しえないことを認識しつつ、本フォーラムでは、東アジアの国際公共財形成への基盤として、「人間の安全保障」にひとつの方向性を見出しながら漸進的な活動を続けてきた。とりわけ日本・中国大陸・台湾・韓国における国際セミナー「現代中国と東アジアの新環境」を十数年に渡り経年的に開催し、近年における東アジアの緊張関係が顕在化する中でも、face to faceの相互の信頼を糧に、一年また一年と国境を越えた対話を地道に続けてきたプロセスがあるからこそ身をもって実感するのは、21世紀の東アジア地域において、20世紀のような「戦争」により分断されることのない、紛争や対立を生み出さない「アジア地域史像」の構築であり、未来世代に引き継ぐべきことは、争いのない平和であるという祈念を深めてきたのである。

これまで、上記の「記憶の継承ラボ」の活動を通じて各地の暮らしの現場にて調査を重ねる中で、「ポスト体験時代」の到来が目前に迫りながらも、過去の表象やその記憶の継承のあり方を巡り、それぞれの地域が抱えている複雑な現実が徐々に見えてきた。さらにそれらが戦災による焦土からの再建へと邁進していった「戦後」の社会変動の過程で構造的に形成されてきたという看過できない側面であり、また東アジアにおける冷戦体制の構築とその崩壊という激動する歴史的過程とも軌を一にしてきたことも分かってきた。

それゆえに、本研究では、「ポスト体験時代」の記憶の継承に向けて、それぞれの地域に生きる人びとが営み続けてきた戦中戦後の生活の現場を「複数の歴史空間が重層す

¹ 大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター・IMPACT オープンプロジェクト「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ(記憶の継承ラボ)」HP
<https://relay-memories.hus.osaka-u.ac.jp/>

² 詳細は以下を参照されたい。田中仁・三好恵真子 編(2012),『共進化する現代中国研究—地域研究の新たなプラットフォーム』大阪大学出版会

る場」(成田・吉見 2005)として捉え直しつつ、それぞれの土地の歴史を背負いながら現在へと向き合い、さらには未来への展望を拓いていくという「連続性」の中から問い直すことを重んじた。すなわちそれは、戦時から戦後への連続性を「人々の生きた歴史」として凝視することにより、アジア地域史の視座から戦争・戦後体験の共有とその継承の可能性を討究し、さらにはそれらを生活者の思想的営為として未来に切り拓いていく試みに挑んだのである。

本研究におけるこの重みある挑戦は、具体的には以下に詳述していくように、「復帰前後の沖縄の島々から写真家たちが問い直していった「戦後」の暮らし」、「日中「二つの東北」の繋がりと複数の意味」といった研究論文に結実することができた。それと同時に、現場との協働対話、すなわち米軍嘉手納基地の門前町として発展し、「基地の街」、「戦後沖縄の縮図」とも形容される沖縄市において戦後史を長年見つめ直してきた現場の実践者たちとの協働による未来への作品作りとして、大阪大学中国文化フォーラムよりブックレット『ポスト体験時代の記憶の継承——アジア地域史の視座から祈念する私たちのダイアログ——(「21世紀課題群と東アジアの新環境」シンポジウムシリーズ③)』(三好恵真子・吉成哲平編, 2025年)を刊行するに至った。加えて、分野を横断する若手研究者が中心となり、アジア・太平洋戦争のみならず、「戦争」という災禍そのものが人びとに刻み込んできた出来事の「表象不可能性」や「記憶の継承」を巡る種々の困難と向き合うため、ホロコーストを経験した語り得ない生還者たちを写した重厚な記録としても知られる映画『SHOAH』(1985年)を手がかりとしつつ討議を重ねたシンポジウムの総括として、ブックレット『出来事の記録と生の記憶 クロード・ランズマン『SHOAH』をみる』(中谷碩岐・瀧口隆・吉成哲平編, 三好恵真子監修, 2025年)を発刊することもできた。

他方で、東アジアからの留学生たちと共に「戦後80年」を迎えた長崎と沖縄をそれぞれ訪問し、各地域の現場の実践者たちとの対話を重ねつつその志を学ぶことで、アジア地域史の視座からの戦争・戦後体験やその記憶の継承に向けて、私たちはいま、何をなすのかを各々が内省していく機会にも恵まれた。こうした記憶の継承の現場において得られた貴重な学びの数々については、学術論文や書籍等の形のみならず、社会へより幅広く発信することで多様な対話の場を拓いていくため、とりわけ本研究における独創的試みとして、これまで現場での撮影を続けてきた写真表現にその可能性を託しつつ、写真展「「戦後」の生活者の思想的営為の記憶とその現在」及びギャラリートーク(2025年7月28日(月)～30日(水), 大阪大学人間科学研究科本館1階・インターナショナルカフェ)も開催することが出来た。

従って、本稿ではまず、次章にて「ポスト体験時代」が迫りつつある近年の戦争体験や記憶の継承を中心とした関連先行研究とその視座の特徴について把握した上で、とりわけ各地域において体験者と非体験者を繋ぐべく存在である「伴走者」としての生活者の思想的営為を「記憶の継承の核心」として位置付けていく本研究の立ち位置について

明確化したい。そして、第3章では上述した研究論文やブックレットの刊行、長崎と沖縄の現場における実践、そして写真による表現活動といった本研究の成果をそれぞれ概説していく。最後に第4章では、以上の研究成果を踏まえつつ、東アジアへ拓かれた「ポスト体験時代の記憶の継承」に向けて具体化された事柄について、更なる考察を深めながら未来への展望を描いていきたい。

2. 「ポスト体験時代」へ向かう近年の戦争体験や記憶の継承を中心とした先行研究とその視角の特徴

前章で触れたように、アジア・太平洋戦争の終結から 80 年が経過し、戦争体験者の証言が聴き取れなくなる「ポスト体験時代」に入りつつある昨今、戦後派あるいは戦無派世代による戦争研究が活況を呈している³(上野 2022)。中でも近年の戦争体験や記憶の継承を巡る研究動向の特徴の一つとしては、それまで語られてこなかった記憶が「戦後 80 年」という時間を経ることにより徐々に浮かび上がる中で、戦無派世代の表現者たちによる戦争記憶の表現の試み(大川編 2021 等)が増えつつある点が挙げられる(上野 2022: 38)。しかしその一方で、戦争体験の継承が急がれる余り、敗戦後に戦争体験世代と戦後世代との間で先鋭化してきた当時の複雑な対立や過酷な戦場体験を巡る当事者の語り難さなどが等閑視され、それにより戦争体験にまつわる記憶が現在の立ち位置から定型的なストーリーとして再定置されたものとして継承されてしまう危険性への指摘(福岡 2020)にも目を向ける必要がある。つまり、「ポスト体験時代」の到来が迫ることで、それまで語られてこなかった、あるいは語られにくかった記憶が新たに浮上りつつあるものの、「戦後 80 年」という長い歳月を通して、当事者が抱え続けざるを得なかった、計り知れないそれぞれの苦悩や葛藤を巡っては、我々が可能な限り当時の視点へと接近しながら学び直していく必要性が示唆されているのである。

それゆえに、例えば被爆者への聞き取りの過程で調査者がしばしば投げかけられる「体験したものでないとわからない」という言葉から、被爆者と非被爆者との間に厳然として広がる境界線の問題が問われてきたように(八木 2008)、社会的、歴史的な出来事にまつわる体験者と非体験者の間の「体験の非共有性」といかに向き合うべきかが、依然として重要な論点として残置されている。とりわけこの点に関しては、調査者と研究対象との関係性や彼ら彼女たちを眼差す調査者自身のポジショナリティを問いながら(小倉 2013)、非体験者が当事者の体験にいかに参与していくことが可能であるのかについて調査を通じて表現していく試み(小倉 2017, 2021 ; 屋嘉比 2009 等)が蓄積されつつある。例えば、沖縄戦と米軍占領史をめぐる記憶の継承の可能性について、歴史学者の屋嘉比収は、体験者の語りを非体験者が繰り返し聞き取りつつ、更には彼ら彼女たちがその外側へと語り直していくことによって、戦争を経験していなくとも沖縄戦の「当事者性」を獲得していく過程を重視している⁴(屋嘉比 2009: iv)。また、社会学者

³ 社会学者の上野千鶴子は近年の戦争研究の対象やアプローチに関して、①「戦後の平和」が日本ローカルな文脈でしか成立し得ないことを踏まえた「あの戦争」か、継続する戦争か、②対象とする戦争の時期にまつわる「近代戦か、ポスト近代戦か」、③歴史学における「記憶論的展開」を踏まえた「体験か、記憶か」、そして④軍事力だけを「暴力」として定義して良いのかという「平時か、非常時か」、更には⑤戦争の比較研究の可能性を拓いていく「戦争の特権化か非特権化か」という 5 つの論点を指摘している(上野 2022)。

⁴ 「自分の位置から沖縄戦を絶えず再審する点にこそ、体験者と次世代との共同作業による、記憶の「継承」の可能性があると言える。記憶を「継承」ということは、「学びなおす」ということだ。そのような困難で地道な作業を積み重ねていくことが、戦後世代の非体験者が沖縄戦

の高山真は、語り部である長崎の被爆者へのライフストーリー・インタビューを何度も重ねていく中で、その語りを自己の生活経験と重ね合わせながら被爆者の痛みを共に受け止めようとしてきた共同的なプロセスにより、記憶の継承の可能性を提示してきた(高山 2016)。

以上、体験者への聞き取りの過程を経ることに伴う非体験者の内省や模索等を注視した既存研究において、中でも近年は体験者から非体験者へのトラウマ記憶の共有に関心が集まっている点は特筆すべきであり、とりわけ「トラウマの二次受傷(トラウマの感染)」に体験の継承への一つの方向性が見出されている(蘭 2021; 今野 2021)。具体的には、それは死者を含む他者の痛苦を私たちが自らの身体を介して受け止めていくこと(今野 2021: 421)とされている。つまり、戦争にまつわる人びとの経験や記憶の継承のプロセスは、私たちが過去の出来事を知識として得ることだけに留まらず、非体験者の「身体的、情動的な実践」(田中 2021: 130)によっても支えられることが示唆されている。こうしたトラウマとしての戦争体験は、当事者が言語化することが困難である点に鑑みて、近年は戦争体験者の家族等の近親者による「二次証言」を紹介することで戦争体験の継承が拓かれていく可能性も論じられており、とりわけ彼ら彼女たちが「非当事者」ではあるものの、身近な家族として戦争体験者との関係性を継続してきたがゆえに「証言者」となりうるとの指摘(中村 2022)は特筆すべきである。すなわち、「ポスト体験時代」の到来を見据えた近年の戦争体験や記憶の継承にまつわる関連先行研究では、身体性や情動を重要な媒介としつつ、戦後世代の非体験者へといかにして「当事者性」を押し広げていくことが出来るのかに関してとりわけ議論が活発化しつつあるという特徴が見えてくる。

他方で、これまで光が当てられてこなかった戦争体験や記憶の重みに眼差した以上の関連研究における新たな開拓に敬意を払いつつも改めて留意すべきは、昨今の日本社会において、主にメディアにより媒介されながら「継承」され得る戦争体験や記憶は、日本とアジア諸国間よりも日米関係に限定されるのみならず、「被害者」としての体験や記憶が選択される傾向にあることである。さらには戦争体験や記憶の継承が今日の社会的課題として主題化される中で、そうした傾向はより増幅される危険性さえも示唆されている(米倉 2018)。つまり、戦後 80 年が到来する中で戦争体験や記憶の継承への関心が高まりながらも、その「継承」からは、「アジアとの関わり」がともすれば置き去りにされがちであったという指摘は、ここで見逃すことはできない。

それゆえ、上述のように、東アジアにおいて経済的、文化的な相互依存関係が深化しているにも関わらず、依然として第二次大戦を巡る歴史認識が相克していることが地域協力を阻んでいる(油井 2020)とも言える。その一方で、今日の日本社会においてはアジアが看過されながら選択的な記憶の継承が志向されがちな背景には、歴史的あるいは

や「集団自決」を自分自身の問題として、「当事者性」を拡張しようとする試みへとつなげていく方途であると私は確信している。」(屋嘉比 2009: 54)

昨今の社会状況にも起因する様々な要因が複雑に絡まり合っていることも推察される。これらを踏まえた上で、本研究において特に刮目したいのは、中国革命や朝鮮戦争以降のアメリカによる東アジア戦略の下で、韓国、台湾、ベトナムは「反共」の軍事的防波堤としての役割を担った反面、日本はその補完的役割として基地を提供しつつも東アジアの経済的中心として位置づけられてきた点である。同時に、こうした冷戦期東アジアにおける分業体制下において戦災からの復興と高度成長を遂げてきたという戦後史(西川・大野・番匠編 2014; 道場 2021)の果てに私たちの生きる現在の暮らしがあるという側面が、概して忘れ去られがちなことである。言い換えれば、事実上の対日単独占領を実施したアメリカが、第二次大戦後の国際環境における圧倒的な覇権を背景として、日本を冷戦下の西側陣営に組み込むために「寛大な講和」⁵を推し進めたことは、戦後日本社会がアジア諸国からの要求を直視することなく経済復興と成長の道を突き進むことを可能にしてきた(吉田 2005)。加えて、こうした軍事的・経済的な外部要因のみならず、文化的な大衆消費の次元においても、人びとは戦時期までの東アジアにおける日本の帝国主義を引き継いでいった「アメリカ」に魅了されていくことで、アジアとの関係を忘却してきた現実(吉見 2007)があることを看過することはできない。

それゆえに、日本社会の過去と現在のアジアに対する「加害性」の認識に根差しつつ、草の根のレベルにおいて市民がアジアとの連帯を希求する様々な運動を越境的に展開していったこと(大野 2014; 平井 2020; 道場 2008, 2011)は特筆に値する。例えば 1960 年代から 70 年代にかけてのベトナム戦争の激化に伴い活発化した反戦運動を通じて見出された動向にそれを見ることができる。これらはアメリカの東アジア戦略の下で引かれた地域間の分断線の人びとが乗り越えようとしていった模索であるとともに、冷戦終結から 30 余年を経ながらも未だ硬直化したままの今日の東アジア情勢の下で生きる私たちにとても示唆に富むと考えられる。なぜなら、「戦後」という未だ十分に開拓されていない多様なひとびとの経験を私たちが見つめ直すことは、「「いま」を相対化し、別様な可能性を学びとること」(道場 2008: 18)へ拓かれていくからである。

従って、いま改めて思い起こしたいのが、これらの運動の淵源の一つとなった『思想の科学』に象徴される通り、「戦争と敗戦」という未曾有の経験と真正面から、根源的に向き合っていた人びとが、「人間のもつ弱さ、あいまいさ、あやうさ、もろさ」(天野 1996: 184)を身心から受け止めつつ、日々の語られない暮らしの中で生起する様々な問題を各々の生き方によって解いていこうとした「生活に根ざした思想の力」(天野

⁵ 例えば、憲法・憲法制定史を専門とする古関彰一によれば、サンフランシスコ講和条約は対日賠償請求権の放棄を定めていたがゆえに、講和条約に調印した国々の議会は任意賠償協定に合意するまでは条約の批准を拒否した。しかし、日本との交渉により結ばれた任意賠償協定は、必ずしも「賠償」協定ではなく、経済協力という「経済援助」をその旨とするものであった(古関 2013: 246)。

1992: 108) にこそ、敗戦後の激動する社会を無数の小さな現場(桜井 2007)から切り拓いていく可能性が内包されていたことである。しかしながら、このように「戦後」を生きる人びとが日常の暮らしの中で問い続けてきた、見過ごされがちな東アジアの戦争や災禍の記憶とその継承を巡る模索を辿り直していく試みは、未だ端緒についたばかりと言えるのではないだろうか。

従って、本研究では、「ポスト体験時代」へ突入しつつある近年の戦争体験や記憶の継承に関する先行研究とその視角の特徴を踏まえつつも、それらとは立ち位置を異にしている。すなわち、調査者が予め設定した「体験者／非体験者」という枠組みの中から考察したり、あるいは苦悩やトラウマのみに注視したりするのではなく、「体験者」と「非体験者」を繋ぐべく存在である「伴走者」が、各地域において伝え継いできた生活者の思想的営為に注視しながら、彼ら彼女らの実践とその重みを介しつつ、現在の私たちの生きる時間への連続性の中で捉え直していきたい⁶。その際、戦争体験者たちと共に「戦後」の現実と向き合い続けてきた「伴走者」たちの暮らしの経験へと可能な限り当時の視点から降り立ちつつも、今日への連続性を問うことで、戦後日本社会において徐々に薄れゆく東アジアとの紐帯を「結果の権力というべき「強い歴史」の効果」(佐藤 2001: 173)によって現在の視点から裁断することなく、「歴史内在的」(前掲書)に描き出していくことを試みていきたい。

⁶ 被爆体験を巡る当事者性の獲得に関して、社会学者の直野章子は被爆者運動の出発点にあった「被害者の痛みに耳を傾ける聴き手」の存在を念頭に置いた上で、被爆体験の記憶を被爆者と共に作り続けながら、核廃絶や戦争反対の理念に結び付けてきた「同伴者」の重要性を指摘している(直野 2020)。こうした指摘を敬意と共に参照しながらも、本稿で筆者らが提起する体験者と非体験者を繋ぐべく存在である「伴走者」は、直野の言う「同伴者」とはやや立ち位置を異にしている。例えば、筆者らの既報(吉成・三好 2021)において具体化した通り、長崎の被爆を生涯見つめた写真家の東松照明は「反原爆」という理念よりも、むしろ戦中戦後の時代を生き抜いてきた同じ一人の「生活者」として、一人ひとりの被爆者の苦しみや喜びを共にしつつ、彼ら彼女たちとの距離を徐々に埋めながら撮り続けていった点に留意したい。

3. アジア地域史の視座からの共振する戦争・戦後体験とその現在への連続性をたどり直す

前章において整理した近年の戦争体験や記憶の継承を巡る先行研究とその視角の特徴を念頭に置きつつ、本章では、本研究の成果としての研究論文に結実した「写真家 東松照明らが復帰前後の沖縄から問い直していった「戦後」の現実」、「日中「二つの東北」を生きる中国人女性の移動をめぐる歴史実践」、および前述の大阪大学中国文化フォーラムより刊行し 2 冊のブックレットとして総括した「沖縄の現場の実践者たちとの協働」と「分野横断的な若手研究者らの討議を通じた未来への作品作り」について、それぞれ概説していく。加えて、長崎と沖縄を中心とした現場における実践活動の成果として、2025 年に東アジアからの留学生たちと共に訪れた「戦後 80 年」を迎えた記憶の継承の現場で日々尽力し続ける実践者たちとの対話」と、さらには「写真展「戦後」の生活者の思想的営為の記憶とその現在」及びギャラリートークの開催」から見えてきた事柄についてもまとめていきたい。

3-1. 写真家 東松照明らが復帰前後の沖縄から問い直していった「戦後」の現実

3-1-1. 復帰後の沖縄の現実から問い直された「戦後」—写真家 東松照明が島々で確かめていった生活の実感—⁷

「戦後写真の巨人」とも称される東松照明(1930-2012)は、被爆後の長崎や復帰運動に揺れ動く沖縄などの戦後社会を 1950 年代より半世紀以上にわたり撮り続けた写真家として知られている。戦時下の名古屋で少年時代を送った東松は、敗戦と占領を経た戦後の急速な「アメリカニゼーション」と向き合う人びとの暮らしを見つめていった。中でも、明治生まれの人びとを撮影した「日本人」シリーズと、基地とその周辺の街を写した「占領」シリーズの結節点として、1969 年に日本復帰前の沖縄を初めて訪れた彼は、米軍統治下の現実に衝撃を受けることで同地を撮り続けつつ、最晩年を沖縄で終えるまで数々の貴重な作品を未来に託してきた。

これまで写真史や写真論に見られる先行研究での復帰前の沖縄へ向かった東松の足跡に関しては、当時の日本本土での沖縄に対する急速な関心の高まりを背景に多くの知識人やジャーナリストらが同地を訪れた時流に乗じて、東松も「占領」という暴力的な状況を告発した(倉石 2010 ; 鈴木 2005 ; 仲里 2009)と論じられてきた。加えて、復帰前後の 1972 年から 1973 年にかけて那覇と宮古島に暮らし、73 年秋に東南アジアを旅したのちに、1975 年に刊行した写真集『太陽の鉛筆—沖縄・海と空と島と人びと・そして東南アジアへ』(以下、『太陽の鉛筆』)として結実したとされる復帰後の東松の軌跡を巡っては、彼が「アメリカニゼーション」の浸透していない南島の風土に魅せられな

⁷ 本節において報告する研究成果の詳細は以下の論文としてまとめており、参照されたい。
吉成哲平・三好恵真子(2025),「復帰後の沖縄の現実から問い直された「戦後」—写真家 東松照明が島々で確かめていった生活の実感—」,『生活学論叢』46, pp.15-29

がら作家性を排していった匿名的な記録(鈴木 2005 ; 仲里 2009)と評される一方、その群島の神話的なイメージについては高く評価もされてきた(今福 2016)。

他方で、こうした南島の精神文化への眼差しに関しては、彼が「原日本」を島々に見出すことで、未だ基地の残る復帰後の沖縄の現実を忘却していったとする批判(小原 2007,2008)もなされている。つまり、東松が「本土の人間の一人」としての葛藤を抱えつつも沖縄に暮らす人びとの現実との距離を埋める中で残していった写真が、以上の先行研究では撮影当時の歴史的文脈から乖離しつつ、いずれも後年になって鑑賞者の視点に応じながら、いかようにも解釈されてしまう危険性が浮かび上がってきた。

そこで、これまで筆者らは、独自の方法論として開拓してきた「写真実践」より、東松が表現し続けた沖縄の暮らしについて明らかにしてきた(吉成・三好 2022,2023b,2025b)。すなわち、「写真実践」とは写真家たちが刻々と残していった多様な表現媒体を渉猟し、当時の時代背景も踏まえた上で、彼ら彼女たちが撮影行為を介して受け止めていった現実を体系的に捉え直す方法論である(吉成・三好 2024,2025a)。これは、写真家たちが見えない未来を眼差しつつ撮影を続けていった当時の視点に降り立つことに加えて、彼ら彼女たちの見つめた現場に筆者らが足を運びつつ、再帰的な撮影活動も積み重ねながら相補的に論証していくことを特徴としている。

以上の「写真実践」による既報(吉成・三好 2022)では、まず東松の沖縄での撮影活動の原点として彼が衝撃と共に直面した復帰前の「基地の中の沖縄」の現実について明らかにした。具体的には、東松が数世紀にわたる日本本土と沖縄との間の非対称的な関係性の歴史を顧みながら、米軍統治下で不安定な生活を送らざるを得ない一人ひとりの葛藤を捉えていったことが見えてきた。その際、具体化されたことは、人びとは復帰運動が高揚する中で平和憲法を持つ日本への「復帰」を希求しているにも関わらず、日本本土ではそれが空文化しているという現実直面することで、東松は、「祖国の退廃に対して何もし得なかった本土の人間の一人」(東松 1969a)として沖縄の復帰を容易には肯定し得ない複雑な胸中を抱えていた点を特筆しておきたい。

このように、1970 年前後の日本本土では高度成長が「平和」と「豊かさ」をもたらす一方で、管理社会化が進み、表現の自由が狭まりつつあった。こうした当時の社会的背景の元、東松らが中心となり幕末・明治から終戦までの日本における写真家たちの歴史を初めて体系化した「写真 100 年—日本人による写真表現の歴史展」(日本写真家協会、1968 年、以下「写真 100 年」展)とそれを通じた内省から、繁栄の影で見過ごされてきた現実を当時の写真家たちがいかに捉えられるのかをそれぞれに模索していったことも分かってきた(吉成・三好 2023a)。そして、中でも東松が復帰前後の沖縄で出会った一人ひとりの人生史を聞き取りつつ、戦中戦後の時代を通して営まれ続けてきた暮らしの歴史を徐々に学ぶ中で、現場での「私」の経験から生み出される表現(「私性」)を、いつかその写真が眼差される未来へと拓こうとしていったこと(「公性」)を明らかにしてきた(吉成・三好 2023b)。

しかし、1972年5月15日の施政権返還により日本本土では「沖縄問題」への関心が急速に低下する一方、沖縄では基地問題を残しつつも開発と観光を主とした経済振興が図られていく時代に差し掛かっていた。そこで、それでも東松は同地を見つめ続けていたことを、当時の彼の撮影行為を介した視点から慎重に読み解き直す必要があると考えた。

従って本研究では、復帰後の沖縄の島々の生活の現実を東松がいかに表現し未来に託そうとしたかについて、「写真実践」より明らかにすることを目的とした。具体的には、復帰後の1970年代にかけて刊行されていった東松の写真集『太陽の鉛筆』（1975年）と『光る風—沖縄』（1979年）に加えて、写真エッセイ『朱もどろの華—沖縄日記』（1976年）を「写真実践」による分析対象としつつ、さらにはこれらの作品の初出の表現媒体にも力点を置いた。

まず、当時の東松が撮影を行った1970年代の沖縄を巡る歴史的状況として把握しておく必要があるのは、1950年代以降の基地関連収入の持続的な拡大に伴う本島北部、宮古、八重山、そして周辺離島から本島中南部への人口集中（大城 1977）に加えて、日本本土から沖縄へ開発と観光が広がっていった背景である。とりわけ、1975年の沖縄国際海洋博覧会の開催に象徴される通り、70年代以降の「観光リゾート」としての沖縄イメージが広がっていくことで「観光と基地のリアリティの二重性」が構築されつつあった（多田 2008）。

以上の背景を踏まえつつ、『太陽の鉛筆』は「沖縄編」に関しては宮古島に、また「東南アジア編」についてはインドネシアに表現の力点が置かれていたことが分かる。ただし、同書にはコザや普天間等の沖縄島の基地周辺の街で撮影されたカラー写真も組み込まれており、さらには東南アジア編では東南アジアで撮影された写真と沖縄での写真が入れ子の形で組み込まれている点も特徴となる。同書において、東松は島々に暮らすおじいやおばあ、祭祀を担う女性たち、そして青年や子どもたちを主に見つめていたものの、同時期のエッセイである『朱もどろの華』からは、復帰によって「軍用地がほんの少し返還されただけで、基地としての機能は逆に強化された」（東松 1974a: 98）と考えていたことに留意したい。さらには、本土からの開発と観光が島々に広がりゆく現実に危機感を抱いていたことも分かる。ただしここで見過ごせないのは、『朱もどろの華』の初出の記事では詳述されていた西表島で開発を進める本土資本の企業名が単行本化の際に割愛されていた点である。つまり、自らの祖先たちが沖縄で何をなし、そしていま日本人が沖縄で何をしているのかという問いを抜きにしては沖縄にいられないという「こだわり」に突き動かされて東松は復帰後の沖縄での撮影を続けていたことが窺える。

そして、こうした現状を念頭に東松が身体を介して受け止めようとしていたのが、「しまちゃび」を経験した島人たちがかつて島抜けをしていった歴史であった。その際に、例えば東松は西表島を歩く中で人びとが島から離れることで廃村に追い込まれていっ

たある集落を巡り、ふるさとへの愛着と離島苦の狭間で悩む人々の語りを耳にしながら撮影を続けていたように、過疎化の進みつつある眼前の現実と「島抜け」の歴史を結びつけて受け止めていた点に留意したい。それゆえ、彼はそうした島の共同体を依然として支え続けるものとして、祭祀に見出される人びとの「濃密な連帯意識」に惹かれながら、島に暮らし続ける人びとの生きざまを見つめていたことが分かる。

このように、東松は一人ひとりが島でいかに生きてきたのかを同じ「生活者」としての視点から受け止めようとしていたことが見えてくる。具体的には、彼は島で進む過疎化を前に「島は呼吸をやめるわけにはいかない。年寄りと子供が、若いモンの役割を分け持つことになる。シマの年寄りに張りがあるのはそのためだ。(中略)過疎化—老人孤独といった図式でとらえられないシマの複雑な表情がここにある。」(東松 1973: 39)と記しており、さらには 20 歳前後の若者たちを写した東松の写真の背後には、島の現実を前にしつつ故郷からの離れがたさを抱えるそれぞれの葛藤も記されていた。

以上の復帰後の沖縄の島々で直面した複雑な現実を念頭に、東松は「汽車や車に乗らなくても、その気になれば、歩いて、みんな見ることができるという手ざわり」や「足ざわり」を重んじながら、宮古島から東南アジアの「ローカルタウン」を歩いていくことになる。彼によれば、総じてその旅は「都市化＝文明化と人間のくらしの関係」を問うものであった(東松 1974b)。ここで見過ごせないのは、彼自身は「ふるさと」を持たない「都市人間」であることを島での暮らしを通して次第に意識しながら、それまでの生活のあり方に対する反省として島々での撮影を続けていった点である。それは、「原水爆を生み落とすに至った物質文明、都市文明」(東松・篠山 1975)を問い直していくことにつながっていったのである。

なお、これらの東南アジアで撮影された写真の中には、「基地の街」としても知られる沖縄のコザで写された黒人兵の日常やベトナム戦争終結直後のサイゴンで出会った子どもたちが遊ぶ姿も記録されており、ベトナム戦争と当時の人びとの暮らしとのつながりも読み取れる。とりわけ大阪万博の開催に沸き立つ一方で、70 年安保や公害を抱える現実を前に、東松は戦後日本が経済大国となりながらもその退廃が迫っていることを危惧していた点は見逃せない。それゆえ、東南アジアまでを射程に捉えた人びとの日常の暮らしを写した東松は、日本やアメリカなどのナショナルな枠組みには回収しえない⁸、島々に固有の暮らしを越境的に捉えていったと言える。

その後も、東松は沖縄の島々で営まれている暮らしや祭礼を写しているが、久高島の祭祀イザイホーを見つめた写真家の比嘉康雄(1938-2000)との対談から浮かび上がる点として特筆すべきは、島からの人口流出やインフラの整備など復帰後の島々の暮らし

⁸ 東松照明が撮影へと駆り立てられていった戦後の「アメリカニゼーション」については、以下の筆者らの既報も参照されたい。

吉成哲平・三好恵真子(2022), 「インターフェイス」から捉え続けたひとびとの暮らし—写真家東松照明の眼に映り込んだアメリカニゼーション—, 『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』48, pp.147-180

が大きく変容していくことを彼が受け止めつつ、祭りを記録する中で「人間の生活、文化に役立てるために写真を位置づける」必要性(東松・比嘉 1979)を提起していたことである。

ただし、沖縄の島々の風土を前に東松が見出していたのは、敗戦と占領を少年期に経験した彼自身の「戦争の影」でもあったことが分かる。すなわち、当時の彼の写真には青い海や白い砂浜で遊ぶ観光客たちが写っているものの、東松はそこから沖縄戦で亡くなった人びとの存在を感じ取っていたことが窺える。さらには、その数日後に訪れた久米島でも多くの観光客を目にする一方、現地で共に過ごした沖縄出身の写真家の平良孝七(1939-1994)から、その浜ではヤマトの軍人に斬り殺された子供の泣き声が聞こえるから島人たちは絶対に泳がない(東松 1980)という目には見えない歴史を受け止めていた。

加えて、以上の写真と同じ時期に東松はそれまで撮り続けてきた基地周辺の街を再訪していた点も見逃せない。例えば、彼はベトナム戦争終結後の横田、コザ、横須賀にある米軍基地周辺の街を写した作品の中で、ベトナム戦争やドル危機を経て基地の街から米兵が減少していくことで商売が苦境に立たされる一方、それでも日常の生計を立てていかなければならない人びとの複雑な葛藤を伝えていた(東松 1978)。つまり、「復帰」を経て日本本土からの開発と観光が急速に進むことに加えて、ベトナム戦争後の基地周辺の街もまた変容を迫られていく中で、沖縄のそれぞれの土地でその変化に葛藤しつつも日常の暮らしを続けていく生活者の営為を東松は表現していたと言える。

それゆえ、以上の東松の写真表現に対する当時の沖縄における反響として、とりわけ『新沖縄文学』での『太陽の鉛筆』と『朱もどろの華』を巡る書評において、彼がノスタルジアの対象としてではない沖縄の島々の現実を本土の人間としての立ち位置から直視していた点が好評を得ていた点(無署名 1977a)は注目すべきである。実際に、当時の東松は平良孝七や比嘉康雄ら沖縄出身の写真家たちと出会っていく中で、「本土の人間」として自らが写真を撮ることの限界性を意識しつつ、沖縄出身の写真家だからこそ可能である表現に期待を寄せていた側面が窺える。すなわち、東松はそれぞれの立場から復帰後の沖縄の生活の現実を伝えていくことに力点を置きつつ、自らは「日本本土」の写真家であり沖縄の人びとの「伴走者」としての立ち位置から、復帰を経た沖縄の重層的な「戦後」の現実と向き合う人びとの暮らしを表現し続けていたことが明らかとなった。

3-1-2. 沖縄を撮り続けた写真家たちの相互の触発とその距離—東松照明を軸に浮かび上がる島々でのそれぞれの内省—⁹

⁹ 本節において報告する研究成果の詳細は以下の論文としてまとめており、参照されたい。吉成哲平・三好恵真子(2026),「沖縄を撮り続けた写真家たちの相互の触発とその距離—東松照明を軸に浮かび上がる島々でのそれぞれの内省—」,『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』52,

以上の研究成果を踏まえた上で更に目を向けていく必要があるのは、このように東松が沖縄での撮影を続けて行く過程で沖縄の写真家たちとの交流も深めながら、それぞれの立ち位置から復帰前後の沖縄の現実を表現しようと模索していった点である。特に、復帰運動が高揚する 60 年代後半から活動していった比嘉康雄や平良孝七らとの出会いは、お互いにとって「なぜ沖縄を撮るのか」を鋭く問い直させていった重みを持つものの、後述する既存研究では見過ごされがちであったことが見えてきた。

そこで本研究では、復帰前後の沖縄で営まれる暮らしを表現し続けた写真家たちのそれぞれの立ち位置とお互いの触発について「写真実践」より明らかにすることを目的とした。特に東松照明を軸としつつ、戦後沖縄の写真表現を牽引していった比嘉康雄や平良孝七がお互いに対する距離や共感の中で刺激し合いながら、復帰を経て急速に変化する沖縄の現実をいかに見つめ直していったのかを具体化することを目指した。

まず、復帰前後の沖縄と向き合った写真家たちの足跡に関する先行研究に関して、これまで日本写真史は日本本土を軸とした写真史観に基づいていたために、沖縄写真史に関しては体系的な調査は未だ途上にあること(金子 2013)が指摘されてきた。それゆえ、近年は仲里効ら沖縄の写真家や批評家により沖縄写真史が開拓されつつあるものの(仲里 2009,2015)、これらの既存研究では戦後沖縄を写した写真家たちの個別の作家論に力点が置かれがちであるため、同時代におけるそれぞれの立ち位置や互いの関係性については慎重な検討が必要であることが分かる。特に既存研究(鈴木 2005 ; 仲里 2009,2015 ; 倉石 2013 等)では、沖縄と日本本土の双方の写真家たちが復帰運動の挫折による喪失感から離島へと向かっていったとして定型的に論じられてきた。しかし、「復帰」という出来事の意味を後年の視点から過度に強調するのではなく、当時の一人ひとりがいかに沖縄戦後の激動と向き合う中で自らの写真表現を模索していったのかを内在的に読み解き直す必要があると考えられる。

そこで、復帰前後の写真家たちの模索について辿り直すにあたり、本研究ではまずその歴史的背景として、米軍統治下で活発化していった沖縄戦後の写真界の展開について整理を行った。戦後沖縄の写真界を開拓していった山田實(1992)や水島源晃(1992)によれば、戦後の沖縄写真史の特長として、米軍基地と関わりながら写真業務に従事した人びとが写真館等の商売を開拓していくことで始まっていった。彼らは基地建設に伴い本土から訪れた人びとも交流する中で写真表現にも力を注いでいった。とりわけ当時の彼らが目標としたのが、沖縄戦後の文化復興を目的として毎年開催される「沖展」であり、当初の展示では内地や海外旅行等を写した記念碑的作品が多くを占めていた。一方、その後は宮古、八重山の昔ながらの風景や赤瓦の建物、人びとの生活の記録など伝統的な沖縄の風景を捉えた写真が出展されるように変化していった(山田ほか 2003)。当初はこの展示には本土の写真家も招待されていたが、沖縄の現実との乖離が大きく、まもなく出展を取りやめたとされている(山田 2012)。

それでも、彼らは 1960 年代に入り日本本土から続々と訪れるようになるプロの写真家たちから様々な刺激を受けていったことが窺える。特に本土の写真家たちからは、従来の沖縄の伝統的な風物を写した「沖縄的リアリズム」による写真からの脱却を諭されていた(山田 2012)。しかし見逃せないのは、それにも関わらず当時の沖縄の写真愛好家たちにとって米軍基地は撮影テーマにはなりにくかったことである。それは復帰運動が激化しながらも彼らが基地やデモを積極的に表現しようとしなかったことへも通じており、その背景には彼らが米軍人・軍属を主な顧客として生計を立ててきたこと(仲里 2012)も影響していると考えられる。

しかし、施政権返還が迫る 1970 年前後には、こうした前世代の写真愛好家たちの展示が当時の沖縄の激動する世相と乖離していることに対して、当時の大学生を中心とした若手たちが鋭く批判していくことになる(東松 1972)。それゆえ、この時期に沖縄闘争を克明に記録していった本土の写真家たちの表現は、沖縄の若手たちを刺激していったことが分かる。こうした中で 1969 年に東松が初めて沖縄を訪れ、若手たちとの活発な交流を広げていった。特に、東松は同時期から活躍していく比嘉康雄と平良孝七らに新たな写真表現の可能性を見出していたことが窺える。

従って、本研究では、以上の沖縄戦後の写真界の展開を踏まえた上で、中でも比嘉康雄と平良孝七が 1960 年代から 90 年代にかけて発表した地元紙の記事や座談会での語り等の多様な表現媒体を駆使することで、復帰運動に直面していった当時の若手たちのそれぞれの立ち位置を具体化した。

まず、1938 年にフィリピンに生まれ、終戦後に沖縄へ引き揚げてきた比嘉康雄は警察官として嘉手納で勤務しながら 60 年代後半の高揚する復帰運動と向き合っていた。しかし、ベトナム戦争下の 1968 年に嘉手納基地で発生した B52 墜落事故に直面したことが、警察官を辞め、激動する沖縄の現実を撮影することへ彼を突き動かしていくことになった(比嘉 1972)。さらには、東京の写真専門学校と沖縄との間を行き来する過程で、彼は「沖縄問題的視点」とは一線を画した自らの「生れ島」の視点を意識していった(比嘉 1976)という。つまり、施政権返還を前に過熱していく当時の沖縄を巡る報道とは一線を画しつつ、沖縄に育った自らの視点を育んでいったことは見逃せない。

ただし、比嘉が「復帰」を経てもなお抱え続けていたのは「内地」との距離であったことも分かる。例えば、比嘉が復帰直後に日本本土を縦断しつつ撮影を行った当時の記事からは、基地や公害などの経済的繁栄の影に努めて目を向けていたことが窺える。他方で、彼は本土で出会った人びとにとっての沖縄の遠さや、米軍人が街を闊歩する沖縄の「基地の街」とは対照的な岩国や佐世保の街の様子に複雑な思いも抱えていた(比嘉 1973)。

こうした当時の比嘉の沖縄に対する眼差しからは、度重なる「世替わり」に翻弄されてきた人びとの生活へ目を向けていた重みが浮き彫りとなってくる。例えば、復帰直後のコザで出会ったある人が「基地もそのまま残り、そのうえ自衛隊は来るし、給料は安

くなり、物価は上がる、こんな復帰ならしないほうがましだ」と語ったことを受け止めながら、そこに「常に私たち庶民の犠牲の上に世替わりがおこなわれる宿命の島沖縄を見る思いがした」（比嘉 1972）と記していた。

それゆえ、彼は沖縄を統治したアメリカを見つめようと当初は考えていたものの、復帰翌年の 1973 年に民俗学者の谷川健一による取材に同行する中で宮古島にて見たオヤガン祭に衝撃を受けることで、南西諸島の祭りの撮影へと駆り立てられていった（比嘉 1980）。つまり、島々の暮らしへ根を下ろしてきた古来の祭祀を省みること、逆に復帰後の沖縄の現実を見つめ直すそうとしていたことが読み取れる。その際、変化していく沖縄の現実を「己の生きざまを通して写真で見続けて行く」（比嘉 1982）と述べていた通り、比嘉にとって写真による記録は自分自身が沖縄で生きる事と切り離せないものとして位置付けられていたと考えられる。

他方、沖縄本島北部の喜如嘉で生まれ育った平良孝七は復帰前には「沖展」への出展経験があったものの、当時からそれへの反発も抱いていたことが窺える。それゆえ、比嘉と同様に平良も沖縄闘争を写真で表現することに注力していたが、次第に違和感を覚えていったことが分かる。具体的には、復帰後に平良は「これまで沖縄の写真といえば基地の街、米軍基地闘争といったものばかり」であり「私自身そのような写真を撮っていた一人」（平良 1975a）であったと振り返っていた。しかし、これらの「センセーションの中でとりざたされた「沖縄」という被写体の写真」からは「撮った人の心のあたたかさは感じられず、額ぶちに形どられた写真を見るようで、見ている者に疲れを覚えさせるものが多かった」（平良 1975a）とも内省している。それゆえ、平良は「これまでしいたげられてきた離島へ目を向けよう、そういう気持ちにかりたてられ」ていった（無署名 1977b）。

以上の通り、沖縄闘争が過熱する状況から平良が距離を置いていったことは、同時期の山田實や比嘉康雄とも重なり合っており、平良にとっても島々への眼差しは復帰運動が激しさを増す状況に直面する中で内省されていったことが分かる。特に、平良は離島の厳しい現実を前に、沖縄本島で生まれ育った自身の立ち位置を問われていたのである（平良 1972）。

すなわち、平良は島々の暮らしを丁寧に掘り下げながら「自分なりの沖縄」を人びとに伝えていこうとしたと考えられる。また、それは復帰を経て人びとの日常の風景が変わっていく中で、自らの生まれ故郷を地域史として記録していくこと（北井ほか 1979）にも繋がっていった。従って、復帰前後における平良の模索から浮かび上がるのは、撮影行為を介した内省の中で沖縄の歴史的に直面してきた生活の現実を見つめ直していったという重みであると考えられる。

以上の比嘉と平良による撮影行為を介した内省が当時の東松の足跡といかに交錯していったのかについて考えたい。まず、復帰運動が高揚していた当時の比嘉は東松の写真集『OKINAWA 沖縄 OKINAWA』を意識しながらも、沖縄と東京を行き来する過程

で「ウチナーンチュ」としての視点を重んじながら沖縄に生きる人びとの暮らしを見つめ直していった。一方、復帰後に行われた東松と比嘉による久高島の祭礼イザイホーを巡る対談からは、彼らが共に「生活の中に厳然として生きている」祭り（東松・比嘉 1979）を記録しようとしていた共通項が見えてくる。つまり、比嘉は過疎化により変容を迫られていく祭礼を表現しようとする点で東松と立ち位置が共通していると受け止めており、また、東松は本島のコザで育った比嘉が、離島に生きる人びととの間に信頼関係を築く中で撮影を続けてきたことに共感を示していたこと（東松 1979b）が窺える。以上からは、彼らは互いに立場の違いはありながらも、共に沖縄の島々に受け継がれてきた暮らしとの距離を徐々に埋めながら記録として残そうとしていったことが見えてくる。

また、東松と平良に関しては、平良は東松の写真の技術よりもむしろ彼の島々との向き合い方（平良 1978b）から示唆を得ていたことが窺える。例えば、東松が島々の自然や人びとの生活を捉えた写真集である『太陽の鉛筆』について、平良はそれが「「沖縄に生きている」ことをたしかに呼び起こし、ものを見る目を広げるカンフル注射となる」（平良 1975）と述べつつも、とりわけ東松が島の人々との親しい関わり合いの中で写真を残していることに刺激を受けていた。他方で東松は、平良が沖縄の「戦後」という複雑な現実を、「ウチナーンチュ」として身をもって生きる中で生れてきた表現として彼の写真に可能性を託していたこと（平良 1978）が分かる。

以上の東松を軸にみた比嘉や平良との交流からは、既存研究で論じられてきた「復帰」の挫折感から離島に向かったのではなく、復帰運動の激化を前に記録の意味を各々が問い直す中で、自身が沖縄の戦後を生きてきた経験を内省しながら沖縄での表現を深めていったことが明らかとなってくる。そして、それゆえに東松は平良や比嘉から「新しい写真のあり方」が出てきたと述べていたのだと考えられる。特に、復帰を記念して沖縄国際海洋博覧会（1975 年）が開催された 1970 年代以降の歴史的状況（田仲 2010）も改めて踏まえた上で留意したいのは、復帰後の沖縄の風景の急速な変容に対する危惧を背景とした「記録」という方法への自覚であると考えられる。

実際に、比嘉は復帰から 10 年を迎える中で、「私は離島を回っているんですが、かつて個々の島々にあったそれぞれの個性、特徴がなくなっているのに気づきます。特にその違いというのが、子供たちの目を見ればよく分かります」（比嘉良治・比嘉康雄・平良孝七 1984）と述べていた。こうした沖縄の風景な質的な変化を踏まえれば、沖縄闘争の記録から撮影活動をスタートさせた比嘉や平良が、撮り続けて行く中で沖縄戦やそれ以前から沖縄の島々が織りなしてきた歴史への眼差しを深めていったことは示唆に富む。

特に、比嘉が担い手のいなくなっていく久高島の祭祀の記録に力を注ぎ、また、平良が沖縄戦におけるひめゆり学徒隊の聞き書きに取り組んでいたことから、忘れられてしまうかもしれない島々の歴史を捉え、次世代へ伝えていこうと模索していたことが浮

かび上がってくる。つまり、彼らは沖縄の島々に息づいてきた過去からの時間の厚みの上に現在の暮らしがあることを受け止めながら、共に記録し続けていったのではないかと思われる。それは同時期の東松が、「過去は写真にならない」（東松 1983）としつつも、幾重もの歴史の重層性の上において写真が写す「今」と向き合おうとしていたこととも呼応している。こうした眼差しの深まりのもとで、それぞれの写真家たちが生涯をかけて表現し続けた沖縄の暮らしがいかに関今日の現実へと繋がっているのかについても今後更に検討を深めていきたい。

3-2. 日中「二つの東北」を生きる中国人女性の移動をめぐる歴史実践¹⁰

1980年代後半から、日本の地方社会における深刻な「男性結婚難」という現状に伴い、アジアから日本に結婚移住してきた女性の問題が注目されるようになった。そして2000年代までは受け入れ側である日本社会の視点に注目が集まり、「外国人花嫁」が日本の地域社会にもたらす影響に焦点が当てられていたものの、それ以降は、女性の「生活者」としての主体性を重視しつつ、送り出し社会の文脈も視野に入れられるようになってきた。一方で「満洲」に関する記憶は、中国側では「語られない」段階から「語りづらい」段階へと移り変わりつつあり、とりわけ戦争非経験者にとって、より一層、不明瞭となり、それが戦後中国社会においてどのように語り継がれていくのかという新たな課題が浮上している。

本研究では、旧満洲の歴史的記憶を引き継ぐ中国東北部において、80年代以降の「単位制社会」の弱体化に伴って結婚移民となり日本の福島に移動してきた50代から60代の中国人女性に目を向け、日中「二つの東北」の痛みに向き合いながら生き抜く女性の「歴史実践」について、彼女らの主観的意味世界に接近しつつ、対話的構築主義によるライフストーリー法により読み解くことを試みた。3・11震災における地域の外国人への関心を契機に、およそ7年前より福島で調査を始めているが、そこで気づいたのは、この地域に長年に暮らしている中国人は、主として結婚移民の女性であり、中でも中国東北部出身者が圧倒的に多いという現実であった。すなわち、日中国交正常化により1980年代に中国残留日本人の帰国が始まり、彼らや呼び寄せられた家族を中心に日本人との人脈ネットワークが形成されながら、かつての「満洲」の歴史現場である中国東北と日本を繋ぎ続けていたのである。しかし、こうした女性たちの多くは、片言の日本語しか話せないまま移住してきており、長い間日本で暮らす中でもいまだに簡易な日本語を駆使して暮らしている。また日本人の夫が家の長男ゆえに義父母との同居と介護を担うことが一般的であり、夫の苗字を冠した日本の名前を使って暮らしているため、地域の中国人同士であっても互いの本名を知らないことは珍しくないという。

¹⁰ 本節において報告する研究成果の詳細は以下の論文としてまとめており、参照されたい。王石諾・三好恵真子(2025),「日中「二つの東北」を生きる結婚移民の女性たち—ライフストーリー法から拓かれていく「歴史実践」—」,『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』51, pp.1-26

他方で女性たちにとって、「先進国としての日本」のイメージを抱きながら意気揚々と日本に移住したものの、移住後の生活は、思い描いていた「幸せな人生」とは異なるものであった。彼女らは「満洲」時代を直接経験した世代ではないものの、日本への移住経験を通じて、日常生活の中で福島に住む満洲経験者との出会いにより、改めて幼い頃から中国東北部に残る無意識に体感してきた「満洲」の痕跡が蘇ってくるのである。それゆえに彼女らが母国で学んできた「帝国主義的侵略—民族的抵抗」を軸に語られる国家記憶の構造的権力の存在を意識しつつも、複層的に見えてくる「満洲」像を日々の暮らしの中で自ら模索し続けていたのである。こうした彼女らの姿から徐々に理解されるのは、女性たちにとって「満洲」が単なる過去の歴史に留まるものではなく、中国東北部の独特な土地柄と日本の東北部の移住経験を内面化しつつ、現在の暮らしの中で常に過去と関わりながら、「満洲」の記憶を主体的に築いていくことであり、まさに「歴史実践(doin history)」(保莉 2018)であった。

ただし、ここで見過ごしてはならないのは、中国東北出身者の女性が自発的に「インフォーマルな形」で集まりながら支え合い、主体的にネットワークを構築していることである。3・11震災直後の混乱下にて多くの外国人が帰国する中で、家族のために福島に留まり続けなければならなかったことも少なくなかったが、言語の壁がある上に、被ばくや子供の安全への不安が高まる中で、彼女らは中国人同士の間関係により自発的に集まりながら相互扶助のネットワークを形成していったのである。こうして震災を契機に形成され地域に点在する女性ネットワークは、それ以来、女性がリードする地域団体として発展したものもあるが、こうした集まりの場において、彼女らは生活の悩みや喜びを共有しながら相互に支え合う姿があった。ただしその背後には、かつての「満洲」からもたらされた傷跡と重ね合わせるかのように、移住後に待ち受ける彼女らが一人では抱えきれない様々な辛さがあることも見えてきた。それにもかかわらず、彼女らが日本の東北であるこの地に根を張って暮らしを営み続けているのは一体なぜなのであろうか。本研究では、この根源的問いに向き合いつつ、調査を続けながら、彼女らの経験の語りに耳を傾けていった。

加えて、戦争の痕跡を受け止めつつ災害を乗り越えるために、日中「二つの東北」の痛みに向き合いながら生を営むという選択をする中国人女性たちについて理解していくために、「記憶」という目には見えにくい「満洲」の歴史的文脈を念頭に置きつつ、さらにより彼女らの来歴や人生経験そのものに注視していくために、移動の端緒となる、かつての「満洲」が残した工業遺産を基に発展してきた中国東北の「工業単位制社会」の弱体化も重要な手掛かりとした。

こうして調査を進めていく上で、極めて重要になるのが、女性たちの移動を介した経験というものは、客観的に我々が捉えられるというよりも、むしろ彼女らの「語り難さ」の中にあるという側面に目を向けていることである。彼女らの母語である中国語を用いたにもかかわらず、女性たちの話の端々に躊躇や沈黙、微かな抵抗感が見え隠れしてお

り、こうした対話の不調和をそのまま見過ごしてしまうと、語りの表層的な理解に留まってしまうために、経験の語りの奥にある目に見えないものも含めた主観的な意味世界について、時間を掛けて対話し理解していくことを繰り返した。その結果、そうした「語り難さ」が、彼女らが生きる「東北」という社会に潜む複数の権力構造と深く結びついていることも分かってきたのである。

以上の結果、国境を越えた生活の本当の「豊かさ」とは何かを模索しながら展開される女性たちの日々の営みが、「単位制」の弱体化や戦争の痕跡という、双方の「東北」の痛みを受け止めつつも、日中の尊い「結び目」となりゆく「歴史実践」であることが次第に見えてきたのである。

従って、本研究の成果として、「二つの東北」の複数の意味を再確認することができたと言えよう。一つは、論考の中で一貫した姿勢を見せることにより、結婚移民として日本の東北の暮らしで感じたことが、かつて中国東北での暮らしを思い起こさせ、双方の東北での経験を自ら応答しつつ理解しようとする女性たちの姿を表現することができた。それを踏まえつつ、二つ目として、さらに、「南方」と「東京」という対極にある「周辺」としての二つの「東北」が共有する痛みの意味が見えてきたことである。ただし彼女らにとってそれは容易なことではなく、3・11 震災を契機に立ち上げられた女性ネットワークが示すように、共に味わった悲痛な震災経験が、彼女らを「よそ者」から地域社会に受け入れられる存在へと変え、そこから初めて、地域との絆を深めながら、互いに知り、理解し、支え合うようになったのではないかと推察される。この意味において、震災経験は、図らずも彼女らが日本東北地方の重層的な歴史を知ろうとする情動的な起点ともなり得たと言えるかもしれない。そして上述したように、本研究では、満洲移民など特定の歴史的出来事に焦点を当てるのではなく、あくまでも 3.11 災害を経験した中国人女性たちへの暮らしの調査から出発している。ただし、加害/被害の視点に立たないからこそ、調査を続けていく中で、国際結婚を機に日本の東北の地に来たものの、過去から現在に引き続く傷跡を重ね併せながら、さらに災害をも経験した女性たちの営みに重要なもう一つの意味が見えてきたと考えられる。すなわち、「二つの東北」の三つ目の意味は、彼女らが日々の生活の中で受け止めてきた双方の「東北」の痛みというものが、国境を越えて移動する一人ひとりの生活者として、東アジアの歴史の連続性を実感させるものであり、それゆえに国を超えた生活の「豊かさ」とは何かを模索しながら展開される日々の営みが、尊い「結び目」となり得る可能性を示唆することができたのである。

「東北学」を提起した赤坂憲雄は、社会学者の鶴見和子との対談(赤坂・鶴見 2015)の中で、次のように語っている。「この対談のレジュメの中に、「内発的發展論では、国家という単位を離れて、地域を単位にした発展のあり方を模索した。東北学においては、どのような単位で東北をみていようとしているのか。県、都市レベル、もっと大きなあるいは小さな単位だろうか」という問いかけがあります。・・・地域というのは暮らしと

か生業の舞台としては、限りなく小さなムラを起点としてはじまる。けれども、その地域がみずからの内にはらんでいる文化の多様性というものを眺めていると、それはものすごく広い、可能性としては国家を越えているような領域にひろがっているということでしょうか。・・・それがアジアに向かわざるをえない、自分の中の必然のような気がするんです。」と。本研究で論じてきた女性たちは、自らの暮らしの舞台とした「地域」に根差した日々の営みを通じて、国境によって閉ざされることのない、人と人とが様々な形で交錯していることを教えてくれたのである。まさにこれまで見過ごされてきた「二つの東北」における戦後の陰に接近しつつも、災害を乗り越えていく中国人女性たちの行為主体性から描き出すことにより、アジア地域史における新たな営為を見いだすことができたと言えるのではないだろうか。

3-3. 沖縄の現場の実践者たちとの協働と分野横断的な若手研究者らの討議を通じた未来への作品作り

3-3-1. 『ポスト体験時代の記憶の継承—アジア地域史の視座から祈念する私たちのダイアログ—』¹¹

ここで紹介する本書は、2024年10月26日(土)に開催したシンポジウム「ポスト体験時代の記憶の継承—アジア地域史の視座から祈念する私たちのダイアログ—」(主催：大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・拠点形成プロジェクト「21世紀課題群と東アジアの新環境—実践志向型地域研究の拠点構築」；大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター・IMPACT オープンプロジェクト「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ(記憶の継承ラボ)」、共催：沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」；大阪大学中国文化フォーラム)の総括として編纂され、OUFC(Osaka University Forum on China)Bookletのシリーズの一環として、2025年3月に電子版と冊子版にて刊行されている¹²。シンポジウム当日は、沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」¹³(写真 3-1)に携わる実践者たちとの精彩な対話により拓かれていく、これまで文字や

¹¹ 三好恵真子・吉成哲平編(2025),『ポスト体験時代の記憶の継承—アジア地域史の視座から祈念する私たちのダイアログ—(「21世紀課題群と東アジアの新環境」シンポジウムシリーズ③)』OUFC Booklet Vol.19, 大阪大学中国文化フォーラム (ISSN 2187-6487(オンライン)), <https://hdl.handle.net/11094/100627>

¹² 以下、本書の趣旨とその成果については、同書に収録された筆者の「刊行に寄せて」を本稿における成果報告のために改稿した。

三好恵真子(2025),「刊行に寄せて：「ポスト体験時代の記憶の継承」——「歴史への真摯さ」から受け継ぐ生活者の思想的営為」,前掲『ポスト体験時代の記憶の継承—アジア地域史の視座から祈念する私たちのダイアログ—』大阪大学中国文化フォーラム,i-XVII

¹³ 沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」は、沖縄市の戦後史を見つめ直すことを目的として、沖縄戦の降伏調印式から60年の節目となる2005年9月7日にコザ・パルミラ通りに開室した「沖縄市戦後文化資料展示室ヒストリート」と、2009年9月7日に開室した「ヒストリートⅡ」を移転・拡充し、2018年8月8日に再オープンした資料館である。館内には戦後の沖縄市のまちの様子を伝える貴重な写真資料やモノ資料が展示され、沖縄市の内外から多くの人が訪れている。以下のHPも併せて参照されたい。

記録に残されていない貴重な経験や出来事も多く含まれており、本書では、その臨場感を極力失せぬままに伝えるために、録画からの文字起こしを基本とした。さらには 2025 年 2 月に沖縄を再訪し(写真 3-2)、沖縄市史編集に長年尽力してきたシンポジウム当日の登壇者たちから改稿への助言を頂きつつ、沖縄に残されている貴重な写真も併せながら再現を試みた。

そもそも本シンポジウムの開催に繋がったのが、沖縄戦とその歴史を背負った現在についてこれまで多様な学びと新たな視野の広がりを導いてくれた沖縄訪問である。とりわけ冷戦下の 1950 年代に建設が本格化した嘉手納基地の門前町として発展する中で独自の文化を築いてきた街として知られる「沖縄市コザ」を訪れた際、沖縄が数世紀にわたり経てきた歴史の厚みを受けとめつつも、現在も同地で起きている出来事をめぐり、当初、複雑な葛藤を抱かざるを得なかった。ただし、このような思いに対して、様々な背景を持ってコザに暮らす一人ひとりの模索やエネルギーにより、この街がつけられてきたのだという息づく戦後史を論してくれたのが、市史編集に日々尽力される職員の方々であった。そこには、これからのコザの街をつくっていくために、多くの人びとが訪れてその歴史を知ってほしいという、コザに暮らす人たちの眼差しによる「コザの戦後史」の継承への願いが託されていた。それゆえ、ナショナリティや「加害／被害」の対立構図へと分断的に回収されえない、それぞれの地域に生きる人びとの営み続けてきた戦中・戦後の「生活の現場」を重層的な歴史空間として現在の私たちへと連続的に捉え直していくことへの重要性を強く認識するに至った。

まず第一部<話題提供>「コザの戦後史の継承が拓いていく未来への展望」では、①それぞれの土地の歴史を背負う現在から浮かび上がる東アジアとの結びつき「記憶の継承の現場で展開される「戦後」を生きる人びとの複雑な経験」として「記憶の継承ラボ」



写真 3-1. 沖縄市戦後文化資料展示館
「ヒストリート」(2024 年 10 月吉成
哲平撮影)

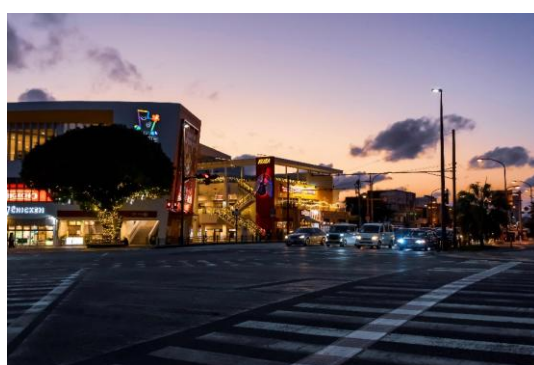


写真 3-2. 沖縄市コザ(2025 年 2 月吉
成哲平撮影)

沖縄市戦後資料デジタルアーカイブ「Web ヒストリート」
<https://www.histreet.okinawa.jp/histreet/FAA10/init#gsc.tab=0>

の大学院生メンバーが、「被爆地長崎での平和活動」、「満洲」の歴史の文脈にある中国東北部、「社会転換期の中国東北部における環境実践」、「写真家東松照明の足跡を辿るために訪れた沖縄」というそれぞれの切り口から、現場での写真を介しつつフィールドでの学びを共有した。また、それを受けて、沖縄市史編集担当である恩河尚氏と伊敷勝美氏からの②現場からのレスポンス「コザの戦後史の継承に込められた思索の軌跡」は、本研究における研究協力者でもある吉成哲平がモデレーターを務め、対話形式にて展開することで、沖縄市の戦後史を見つめ直し、そして継承していくことに込める思いについての理解を促した。

具体的には、まず恩河氏より、「基地の街」、「戦後沖縄の縮図」と形容される沖縄市の中でもコザの街の成り立ちについて丁寧な解説を頂き、内省とともに非常に多くの新たな学びを得ることができた。また今回は事前収録の動画を通じてご参加頂いた伊敷氏からは、終戦から 80 年が近づき、戦争体験を語る方々も少なくなり、そうした人たちの戦後の記憶について記録し、それらをどう継承していくのかということを考えるべき大事な時期に差し掛かる中で、本シンポジウムを開催することは大変な意義深いことであると、冒頭にて激励の言葉を賜った。その上で、恩河氏と伊敷氏から、地域ごとに戦争体験の様相が大きく異なる沖縄の中でも、特に沖縄市に暮らしてきた人びとの複雑な経験についてご教示頂くと共に、「沖縄市」という地域の戦後史を知ることがなぜ？という問いを育み、ひいては未来の「まちづくり」へと拓かれていくという示唆を受けた。続く第二部＜基調報告＞「戦争がもたらした社会の変容と向き合う生活者の思想的営為」における 2 つの基調報告は、それぞれの現場から得た多くの学びにも支えられながらまとめあげた研究論文を掲載している。さらに、第三部の「＜総合討論・応答＞アジア地域史から共に考える私たちの暮らし」では、当日の白熱した総合討論・質疑応答の文字起こしに加え、本書ならではの魅力として、シンポジウムに参加してくれた様々な専門性を持つ 7 名の若手研究者たちが、それぞれの思いを紡いでまとめ上げた寄稿文も収録することができた。

本書を契機に、実際に沖縄市や「沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」」等の現場へと足を運ぶ読者が増えることで、各地域の戦争・戦後体験とその記憶をめぐる「対話」がより一層豊かなものとして未来に拓かれていくことを祈念していきたい。

3-3-2. 『出来事の記録と生の記憶 クロード・ランズマン『SHOAH』をみる』¹⁴

2025 年 7 月末には、大阪大学人間科学研究科・共生の人間学研究分野(現・福祉と人間学)と「記憶の継承ラボ」の共催にて 2024 年 2 月 4 日(日)に実施したシンポジウムの総括として、その後の熟議を重ねつつ、大阪大学中国文化フォーラムよりブックレット

¹⁴ 中谷碩岐・瀧口隆・吉成哲平 編, 三好恵真子 監修(2025), 『出来事の記録と生の記憶 クロード・ランズマン『SHOAH』をみる』OUFC Booklet Vol.20, 大阪大学中国文化フォーラム (ISSN 2187-6487(オンライン)), <https://hdl.handle.net/11094/102323>

『出来事の記録と生の記憶 クロード・ランズマン『SHOAH』をみる』(中谷碩岐・瀧口隆・吉成哲平編、三好恵真子監修)の電子版と冊子体の刊行に至った¹⁵。

哲学を専門とする当時博士前期課程 1 年である 2 名の大学院生により企画された本シンポジウムの当初の趣旨は、ホロコーストの生還者の証言を記録したクロード・ランズマン監督による映画『SHOAH』(1985 年)が提起した「表象不可能性」への純然たる学的関心事が起点であった。しかしながら、2023 年 10 月 7 日にパレスチナ暫定自治区のガザ地区を実効支配するイスラム組織ハマスによるイスラエルへの攻撃と、それを契機として、イスラエル軍も激しい空爆で応酬しながら攻撃を激化し、市井の人々が無残にも戦いの犠牲となる様相を目の当たりにする中で、シンポジウムの趣旨は、情動に駆られながらも、「いま、なぜ『SHOAH』なのか」というように、参加者一人ひとりへの血肉に迫る問いを投げかける形で、色濃く深みを増していったのである。すなわち、ホロコーストの生存者たちの収容所への旅を写しながら、その言葉にならない表情を写し続けることによって「表象の限界」を見る者に訴えかけた『SHOAH』の衝撃を契機として、「記憶の表象」の問題が様々な領域において提起されることになったことを踏まえつつも、本シンポジウムは「「表象不可能性」を前にして、あるいはむしろ表象を前にした躊躇を自覚しつつも、ランズマンはそれでも出来事を記録することを選んだのか」(中谷 2025: ii)という根源的な問いと向き合う若手研究者たちの熱量により生み出された。

本書の第一部には、『SHOAH』が問う出来事の「表象不可能性」と向き合いながら基調報告を行った哲学、減災研究、生活環境論をそれぞれ専門とする若手研究者たちによる充実した論考が収録されている。また、第二部では 2025 年 2 月に登壇者たちがシンポジウム当日の白熱した議論を振り返りつつ、中東情勢や「記憶の継承」を巡る今日の状況も踏まえながら深化させた総合討論を収めている。さらに、第三部では本書ならではの魅力として、当日のシンポジウムに参加したディスカッサントによる、『SHOAH』が提起した根本的な問題を更に幅広い視座から議論した示唆に富む論考に加え、5 名の若手研究者たちがそれぞれの専門性からシンポジウムへと応答した寄稿文も収録しており、「戦後 80 年」を迎えながらも世界各地にて絶え間なく戦争の続く厳しい現状に対してそれぞれの立場から応えていくことを試みている。このように、本企画を通じて、若手研究者たちが専門分野を超えて対話を重ねる中で見出してきた「未来」に拓かれる重要な意義から我々も多くのことを学びつつ、東アジアの厳しい緊張関係に見舞われながらも、引き続き次世代とともに、地域を超えた連帯に向けての可能性に心血を注いでいきたいと改めて誓うことができた。

¹⁵ 以下、本書の趣旨とその成果については、同書所収の筆者による「監修者の言葉」を本稿における成果報告のために改稿した。

三好恵真子(2025)、「監修者の言葉 「他者と出会うための「弛まぬ対話」——未だ「歴史」になっていない現実が続いていることへの理解を深めようとする営み」, 前掲『出来事の記録と生の記憶 クロード・ランズマン『SHOAH』をみる』大阪大学中国文化フォーラム, pp.213-222

3-4. 「戦後 80 年」を迎えた記憶の継承の現場で日々尽力し続ける実践者たちとの対話

3-4-1. 地域に暮らす人びとが切り拓いてきた長崎の被爆を巡る記憶とその継承

2025 年はアジア・太平洋戦争の終結から 80 年という節目の年であることを踏まえつつ、とりわけ、長崎と沖縄の現場において、これまで長年にわたり戦争・戦後体験の継承活動に尽力してきた現場の実践者たちと東アジアからの留学生を含む学生たちとの交流を深めながら、「ポスト体験時代」に向かいつつある今日の各地域の現場における模索について貴重な示唆を得ることが出来た。具体的には、本節で紹介する長崎に関しては、被爆校舎から原爆体験を伝え継いでいる長崎城山小学校平和祈念館¹⁶へ、「長崎原爆の日」である 8 月 9 日に合わせて大阪大学人間科学研究科/人間科学部の学生が中心となり訪問することで、「被爆者なき時代」が迫りつつある現在、私たちがいかに原爆体験との距離を埋めることが出来るのかについて様々な教示を頂いた。特に、このフィールドワークでは、城山小学校平和祈念館に加えて、長崎原爆資料館や長崎市永井隆記念館等の被爆体験を語り継ぐ歴史資料館、さらに爆心地、浦上天主堂旧鐘楼、旧長崎大学医科大学門柱、山王神社二の鳥居等の市内に残る被爆遺構¹⁷も共に歩きながら丁寧な案内を頂いた(写真 3-3, 3-4)。

フィールドワークへ参加した学生たちが長崎の現場に身を置くことで受け止めた実感としては、まず、それまで歴史の教科書や毎夏の報道等を通じて長崎の被爆という過去に関する知識を持っていたものの、市内に今なお残る原爆遺構や被爆遺物を実際に目にすることで痛切に想起されたという原爆による計り知れない惨禍への衝撃である。他方で、被爆直後の焦土に広がっていた匂いや音は被爆者にしか分からず、さらには原爆を生き残った人びとが戦後に抱え続けてきた苦悩は容易には語り得ないものであるという実践者たちからの声の重みに、原爆体験との距離の遠さを改めて感受することにもなった。

概して 8 月 9 日の長崎における原爆死没者への慰霊は、爆心地である松山町の平和公園にある平和祈念像前にて举行される「長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」に象徴されると思われる。他方で、参加者たちは主として行政により大規模な形で举行される慰霊のための式典のみならず、長崎の地域住民が市内各所においてしめやかに捧げてきた

¹⁶ 城山小学校平和祈念館は、爆心地から約 500m の丘の上にあった旧城山国民学校の被爆した校舎の一部を保存し、1999 年に開館した。原爆により亡くなった児童や教職員など約 1400 名の人びとを悼みつつ、被爆がもたらした傷跡と平和への願いを国内外からの訪問者に伝え継いでいる。「記憶の継承ラボ」では、2023 年 10 月に城山小学校平和祈念館の実践者たちを迎えて公開シンポジウム「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ」を開催し、その総括として以下のブックレットも刊行しており、併せて参照されたい。

三好恵真子・吉成哲平編(2024),『記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ(「21 世紀課題群と東アジアの新環境」シンポジウムシリーズ②)』OUFC Booklet Vol.18, 大阪大学中国文化フォーラム(ISSN 2187-6487(オンライン)), <https://hdl.handle.net/11094/94661>

¹⁷ 1945 年 8 月 9 日に長崎へ投下された原子爆弾の被害を今日に伝える遺跡として、爆心地、旧城山国民学校校舎(現在の城山小学校平和祈念館)、浦上天主堂旧鐘楼、旧長崎医科大学門柱、山王神社二の鳥居は、平成 28 年に「長崎原爆遺跡」として国の史跡に指定されている。



写真 3-3. 平和案内人の山口政則氏による城山小学校の「嘉代子桜」に関する解説(2025 年 8 月吉成哲平撮影)



写真 3-4. 平和案内人の山口政則氏による長崎原爆資料館での解説(2025 年 8 月吉成哲平撮影)

死者への追悼と鎮魂の祈りに感銘を受けていたことも特筆しておきたい。

とりわけ、前述の城山小学校において執り行われた第 888 回平和祈念式では、被爆者であり、被爆校舎の保存にも長年にわたり尽力された内田伯氏(2020 年 4 月に逝去)による「目から消え去る物は、心からも消え去る。原爆の遺構は残すこと、見て感じることに、伝えることに意味がある。」という志が世代を超えて児童の皆さんへと着実に受け継がれていっていることを学ぶ貴重な機会も頂いた。このことは、「被爆者なき時代」が目前に迫りつつある現在、私たちが身心を介して被爆の記憶をいかに受け継ぐことが出来るのかを改めて各々に問いかけていった。長崎において被爆体験の継承活動に身命を賭してきた被爆者の方々や、その「伴走者」である現場の実践者たちと共に「原爆の日」を過ごすことが出来たことに對し、衷心より敬意の意を示したい。

以上の長崎への訪問を通じて私たちが内省したのは、「1945 年 8 月 9 日」の長崎における被爆の過去が固定化された歴史的な知識として継承されてきたのではなく、「原爆が人間に何をなし続けてきたのか」という「＜原爆＞の人間的意味」(石田 1986)を、同地において記憶の継承に携わる一人ひとりが絶えず問いかけつつ、受け止め直しながら「戦後 80 年」をかけて継承活動が深められてきたという時間の厚みでもある。

この他にも今回のフィールドワークでは、日本リアリズム写真集団長崎支部による被爆 80 周年祈念写真展「長崎の証言」(長崎市役所)や、ろうあ被爆者を見つめてきた写真家の豆塚猛氏による写真展「ピカドン」のドンが聞こえなかった人々」(長崎ブリックホール)等の示唆に富む展示も見学することが出来た。特に、これまで被爆にまつわる展示において力点が置かれてきた原爆による熱線、爆風、火災、放射線等の物理的破壊の威力のみならず、被爆の後遺症や地域社会からの差別等、戦後の長期にわたり被爆者が受けてきた原爆被災の精神的・社会的影響の解明の重要性が近年一層増しているという指摘(長崎の証言の会編 2023)に鑑みれば、被爆後の一人ひとりの生と死を克明に伝え継ぐこれらの写真はきわめて貴重な歴史資料であると考えられる。今後さらなる調査

を丁寧に進めていきたい。

3-4-2. 沖縄市コザの戦後史を介して見えてくる東アジア冷戦体制と向き合う人びとの生を希求した模索とその記録の重み

2025 年 9 月及び 12 月には、前述した沖縄市の戦後史を見つめ直している沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」(以下、「ヒストリート」)を再訪することが出来た。まず、同年 9 月の訪問では、「ヒストリート」の実践者の方々の協力を得つつ、沖縄が「復帰」に揺れ動いた 1970 年前後のコザを中心に撮影された写真記録に関する資料調査を実施した。中でも、1960 年代から 70 年代にかけてベトナム戦争に翻弄される人びとの生と死を戦場から撮り続けたことでも知られている沖縄出身の写真家の石川文洋による貴重な写真の数々が沖縄市には寄贈されており、本調査ではこれらの写真資料を閲覧する機会に恵まれた。

詳細な分析は別稿に譲りたいが、石川文洋の写真記録から窺える重要な事柄の一つは、当時の沖縄が基地を介してベトナムの戦地と直結しているという現実を受け止めつつ、彼が見つめた反戦平和を求める人々の模索であった。しかし他方では、1969 年の日米合意に基づき施政権返還が進められていく中で、屋良朝苗行政主席ら当時の沖縄の為政者たちが抱えていた苦悩の深さであると思われる。とりわけ沖縄戦後史において、1960 年代以降は沖縄と日本との交流が進んでいった一方で、アメリカによる占領の影が集約された沖縄の現実、日本本土から沖縄への基地の「しわ寄せ」の認識を概して欠いたまま本土へ伝えられてきたこと(戸邊 2011)に鑑みれば、石川の写真は同時代の日本本土において見過ごされがちであった「戦後日本」という現実を東アジア冷戦体制の枠組みから捉え直していく重要性を持つと考えられるため、今後心して調査を深化させていきたい。

加えて、2025 年 12 月の沖縄市への再訪には大阪大学大学院人間科学研究科の留学生も参加しつつ、「ヒストリート」に携わる実践者たちから沖縄市において戦争や「戦後」の体験を記録し、伝え継ぐことを巡る模索について様々な教示を頂いた(写真 3-5,3-6)。中でも、今回の対話を通して私たちが貴重な示唆を得ることが出来たのは、アジア・太平洋戦争の終結から 80 年を経た今日、沖縄戦の体験者のみならず、その後の四半世紀以上にわたり沖縄で続いた米軍による統治や復帰運動等の「戦後」を経験してきた人びともまた少なくなりつつあるために、後世への記録として残していく必要性が益々高まっていることを現場の実践者たちが身をもって受け止めている点である。

また、前述したブックレット『ポスト体験時代の記憶の継承—アジア地域史の視座から祈念する私たちのダイアログ—』においても実践者たちが語っていたように、沖縄戦後における人びとの経験は、同じ沖縄県内であったとしても、彼ら彼女たちがどの場所において終戦を迎えたのかによって大きく異なっていることを改めて強調されていた。



写真 3-5. 沖縄市照屋におけるかつての「黒人街」を巡る街歩き(2025年12月吉成哲平撮影)

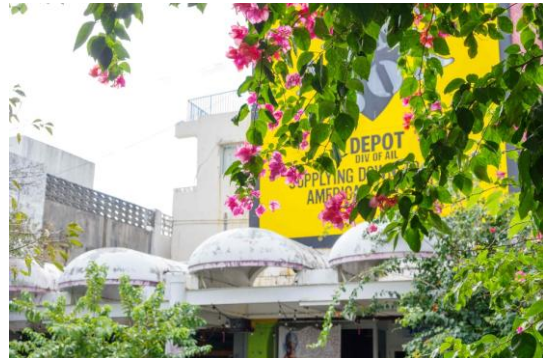


写真 3-6. 道路拡張工事が進む沖縄市コザ「中央パークアベニュー」(2025年12月吉成哲平撮影)

換言すれば、コザに象徴される沖縄戦後に基地が建設された地域とそうではない地域との間では、人びとが経験してきた「戦後」は異なってきたがゆえに、私たちはそれぞれの地域性を踏まえながら「記憶の継承」という課題と向き合う必要があることが理解される。

それゆえ「ヒストリート」においては、例えば沖縄戦後の時代を経験しつつも沖縄市外で暮らしてきた来訪者に対しては、戦後の物資不足の時代において人びとが生活の必要性から生み出した様々な代用品や転用品等の道具も紹介することで、お互いに共通する沖縄の戦後体験が喚起されたことがあったという事例も示唆に富んでいた。すなわち、文字資料や口述記録、写真を含む映像資料に加えて、戦後の暮らしを通じて活用されてきた「モノ」の果たす歴史資料としての重要性を再認識することへも繋がった。ただし、他方では、「基地の街」で生きてきた女性たちの声を聴きとることを巡る困難や葛藤など、戦争と基地がもたらした「戦後」という生活の現実を記録する難しさについても内省することとなった。

3-4-3. 長崎と沖縄の記憶の継承の現場における実践者たちの日々の模索から見えること

以上の長崎と沖縄の記憶の継承の現場における実践者たちとの対話を通して浮かび上がってくるのは、体験者と非体験者を繋ぐ「伴走者」として長年尽力してきた彼ら彼女たちが、今後の「ポスト体験時代」の到来を見据えながら、それぞれの地域において忘れてはならない過去の出来事への想像力とその現在への連続性を、いかに来訪者にも呼び起こすことが出来るのかを巡って試行錯誤を続けてきたことである。その際に、実践者たちが各地域において、自身も歴史的、社会的な出来事の直接的な「体験者(当事者)」ではないものの、過去の出来事や体験者の時に声にならない思いを受け止めつつ自身が生きてきた中での経験と徐々に応答させていくことで、各地域の歴史記憶をそれぞ

れの立場から伝え継いできたことは特筆すべきである。

また、以上の過程を通じて、それまで各地域において埋もれがちであった東アジアにまつわる歴史記憶を実践者たちが日常の中で見つめ直してきたことも見逃せない。とりわけ、いわゆる「被害／加害」の記憶に単純には切り分けられないものとして、それぞれの出来事を冷静に伝えていこうと尽力していることは貴重であると思われる。例えば、長崎においては、戦時期に同地で労働に従事し被爆死した中国大陆や朝鮮半島出身者の歴史もまた忘れてはならない原爆の記憶として継承しようと試みられていた。また、嘉手納基地の門前町として発展してきた沖縄市コザでは、朝鮮戦争やベトナム戦争等の「熱戦」により激動する東アジア冷戦体制下において、出自の異なる様々な人びとが日々の暮らしを切り拓こうとしてきた戦後史に関して、文字資料や口述記録、写真を含む映像資料、あるいはモノ資料等の収集にもとづく多角的で精緻な検証が粘り強く進められていることが分かった。第2章で述べた通り、今日の戦争体験や記憶の継承がともすれば日米関係に限定されがちな傾向にあることをアジア地域史の視座から克服していく上で、これらの現場において日々積み重ねられ続けている取り組みは、きわめて重要な示唆を投げかけていることを改めて強調しておきたい。

しかし他方で、「ポスト体験時代」へと差し掛かりつつある現在、現場の実践者たちが「記憶の継承」という喫緊の課題を巡って様々な困難と向き合っていることも見えてきた。とりわけ、長崎と沖縄の両地域の実践者たちが共通して私たちに投げかけていた事柄の一つとしては、身近な周囲に戦争体験者のいない環境で生まれ育っていくこれからの若い世代の人びとに対して、いかにすれば持続的な形で戦争や「戦後」の体験を伝え継いでいくことが可能であるのかという重い問いである。すなわち、アジア・太平洋戦争の末期にかけて生じていった沖縄戦や広島・長崎の被爆という出来事は、筆舌に尽くしがたい痛みと苦しみに満ちているがゆえに、特に戦無派世代の若者たちが受け止めつつ、さらにこれらの地域を繰り返し訪れることで「わがこと」として学び直していくには、今後更なる困難が伴うのではないかという危惧であった。これは、前章において確認したように、近年の戦争体験や記憶の継承に関する先行研究において関心が高まっている「体験の非共有性」の克服や「トラウマの感染(二次受傷)」という論点とも重なり合う問いであることが分かる。それゆえ、実践者たちがこうした問いについて考えていくために、さらに他地域における継承活動の経験との応答や連携を希求していることも見えてきた。

そこで、以上の課題に向き合い、とりわけ戦無派世代の若手研究者たちを軸に据えながら各地の実践者同士の対話を紡ぐことにより継承活動の結節点としての役割を果たしつつ、戦争や災禍の記憶の継承における地域間の連帯を共に実現していくために、昨年2025年の夏には大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・拠点形成プロジェクト「東アジアへ拓かれた「戦後日本」の記憶の継承：地域間を結ぶ対話と歴史実践の拠点構築」

(研究代表者：吉成哲平)の立ち上げに結実することができた¹⁸。今後は、戦無派世代の研究代表を中心に、長崎や沖縄のみならず福島や水俣等の実践者たちとも連携を進めながら、更なる展望を描いていくことを試みていきたい。

3-5. 写真展「「戦後」の生活者の思想的営為の記憶とその現在」及びギャラリートークの開催を通じた社会へのより幅広い発信と対話の場の構築

本節では、以上の「東アジア」を眼差しつつ記憶の継承に尽力する現場での貴重な学びをより幅広く社会へ伝えていくために、研究論文の執筆やブックレットの編纂に加えて、写真展を介して現場を伝え、表現することにも挑戦したことに触れておきたい。

具体的には、大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター・IMPACT オープンプロジェクト「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ(記憶の継承ラボ)」と人間科学研究科環境行動学研究分野を主催とし、昨年 2025 年 7 月 28 日(月)から 30 日(水)にかけて大阪大学人間科学研究科本館 1 階・インターナショナルカフェにおいて、写真展「「戦後」の生活者の思想的営為の記憶とその現在」を開催した(写真 3-7)。上述してきた通り、これまで筆者らは戦中戦後の生活を絶えず切り拓こうとしてきた人びとの模索の歴史の上に今日の現実があるという、東アジアへと拓かれた過去からの重層的な時間の連続性について、現場での内省から徐々に深めることができた。そこで、本展ではこれまで長崎や沖縄、福島、水俣などのフィールドにて撮影を続けてきた写真の展示とギャラリートークを通じて、各地域における戦争と「戦後」の現実と向き合い続けてきた生活者の思想的営為の記憶とその現在への連累について、それぞれが自分の立ち位置から考えられることを目指した。出展作品数は合計 22 点に達し、それぞれの写真にはこれまで各地の現場の実践者たちに学ぶ中で内省させられた事柄をキャプションとして附記した。

連日の猛暑にも関わらず、写真展には遠方の関東を含めて学内外から延べ 50 名の来場があった(写真 3-8)。会期中は、これまで各地で撮影を続けてきた研究協力者の吉成哲平から撮影写真についてのギャラリートーク(各回 30 分程度)も毎日実施し、撮影を介しそれぞれの写真に込めた思いについて詳細な解説も行った。参加者からは、写真を鑑賞するだけでは分からない、一枚一枚の背後に広がっている人びとが模索の中で脈々と受け継いできた暮らしの歴史を共有することへ繋がり、好評を博した。

とりわけ参加者と分かち合うために筆者らが本展に込めた思いは、戦争が終わり、社会が再び立ち直っていったとしても、様々な傷跡や語り得ない思いを長年にわたり抱え続けながら人びとが紡いできた「戦後」という暮らしの現実であり、ひいては、それが近現代の東アジアにおける激動する歴史とも密接に結びついてきたことである。こうし

¹⁸ 大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・拠点形成プロジェクト「東アジアへ拓かれた「戦後日本」の記憶の継承：地域間を結ぶ対話と歴史実践の拠点構築」
<https://www.gjs.osaka-u.ac.jp/project/2025c/>



写真 3-7 写真展のチラシ



写真 3-8. 会場の様子(2025 年 7 月吉成哲平撮影)

た願いを踏まえるならば、参加者から、私たちが普段日常生活を送る中で忘れてしまいがちな「戦後史」とその現在へのつながりについて考えさせられたという感想が寄せられただけでなく、各々が自身の生まれ育った地域において受け止めてきた戦争や「戦後」の経験についても振り返りながら対話する機会に恵まれたことは大変貴重であった。本展の開催を通して、参加者同士がお互いに展示写真を囲みつつ、それぞれの写真から戦中戦後の複雑な歴史の上にある現在について想像力を働かせていくことが出来たことにも、「写真」という表現媒体の持つ力を実感した次第である。

現在、上記の写真展については大阪大学中国文化フォーラムより総括としてのブックレットの刊行を予定している。本書は展示写真とその解説を収録しつつ、さらには当日の展示に参加してくれた諸領域の若手研究者たちのレスポンスも収めることにより、「戦後」の生活者の思想的営為の記憶とその現在」を巡る議論をより一層深化させていきたいと考えている。

4. 東アジアへ拓かれた「ポスト体験時代の記憶の継承」に向けて

本稿では、「体験者」と「非体験者」を繋ぐべく存在としての「伴走者」たちが体験者を日々支えながら各地域において受け継いできた生活者の思想的営為を「ポスト体験時代の記憶の継承の核心」として位置付けつつ、その模索から浮き彫りとなってくる人びとの戦争・戦後体験を、アジア地域史の視座から越境的かつ歴史的な連続性において捉え直すことを試みてきた。さらには、長崎と沖縄を中心として、これらの記憶の継承の現場で筆者ら自身も徐々に内省を深めながら、現場の実践者たちとの協働による作品作りや写真展を介した幅広い対話の場の構築にも果敢に挑戦することにより、「戦後 80 年」を迎えた今日における「ポスト体験時代の記憶の継承」という社会的課題に対する領域横断的ならびに実践志向型の討究を果たしてきた。

以上を踏まえた上で、締めくくりとなる本章では、東アジアへ拓かれた「ポスト体験時代の記憶の継承」に向けて、本研究の成果がいかなる示唆を投げかけているのかについて改めて考えたい。

まず、写真家 東松照明らが復帰前後の沖縄と更には東南アジアまでをも射程に捉えつつ、各々が「なぜ撮るのか？」を問いながら撮り続けていった足跡や、日中「二つの東北」を生きる結婚移民の中国人女性たちの暮らしの中の内省と連帯から浮かび上がってくるのは、沖縄戦や「満洲」を経験した人びとの「伴走者」として生きる彼ら彼女たちが、「戦後」の急速な社会変容により日常の生活から見えにくくなっていく戦争と災禍の痛みを徐々に受け止めながら、その時々現状に対して何が出来るのかを懸命に模索し続けてきたという、一人ひとりの生涯をかけた足跡の重みである。

第 2 章において整理した通り、「ポスト体験時代」への突入を背景に、近年の戦争体験や記憶の継承に関する先行研究では、これまで語られにくかったトラウマ的記憶の浮上と共に、とりわけその「証言者」として戦争体験者の家族等の近親者が果たす役割への注目が高まりつつある。他方で、これらの既存研究を敬意と共に参照しつつも、本研究から示唆されるのは、彼ら彼女たちが体験者と同時代を生きていながらも体験からは隔絶しているという距離の遠さに鮮烈な衝撃を受けることで、時間をかけて「伴走者になっていく」という過程から、「記憶の継承」が新たに拓かれていく可能性が見出されてきたことである。つまり、近親者よりもはるかに遠い「非当事者」であるという自らの立場性が鋭く問われるからこそ、それまで見過ごされがちであった、あるいは触れることすら躊躇われる経験との距離を何とかして埋めていこうと、彼ら彼女たちを駆り立ててきたのではないかと考えられる¹⁹。これは、社会学者の有末賢が、生活史調査において調査者がしばしば直面する当事者の「語り得ないこと」を巡って、「調査者と被調

¹⁹ とりわけ、この点に関しては、前掲のブックレット『記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ』に収録した長崎の現場からのレスポンスである「長崎の平和活動に込める願い」において、平和案内人の山口政則氏が一人ひとりの被爆者から受け止めてきた志について語って下さっており(三好・吉成編 2024: 161-192)、参照されたい。

査者が無言で、手を握り合って、耐えていくこと」(有末 2012: 25)にこそ、その対処への希望を託していることとも重なり合っていると思われる。

そして、各地域において体験者と共に生きる中でその距離を徐々に埋めようとしてきた以上の「伴走者」たちによる模索の重みは、本稿において述べた通り、決して遠い過去の営為ではなく、「戦後 80 年」という節目を迎えた沖縄や長崎の現場でのフィールドワークを通じて、筆者らもまた身をもって受け止めてきた事柄であったことを強調しておきたい。特に、歴史学者の吉見義明が、敗戦から 40 余年を経て、戦場や敗戦の焼跡における日本の民衆の原体験が十分に吟味されないまま、次第に見失われつつあることに危惧を抱きつつも、草の根のレベルにおいて「戦争に対する真摯な点検・検証・反省を行った人々」や「行いつつある人々」が少なくないことに着目している点に留意したい。すなわち、草の根のレベルの人々の営みの内に、忘却されがちな戦争責任やアジアに対して持続する「帝国」意識を乗り越えていく活路をかつて見出していたこと(吉見 1987=2022)をここで改めて踏まえるならば、本研究からは、各地域の体験者と共に生き、時に出会い直して来た「伴走者」たちが、近現代の東アジアと不可分に結びついた戦争や災禍の記憶をそれぞれの日常の中で慎ましやかに内省しつつも、脈々と伝え継いできた点は看過し得ないと主張できる。つまり、それぞれの地域において「共に生きる」という視点に立つことによってこそ見えてくる戦争・戦後体験とその記憶の重要性が、本研究からは示唆されたのである。

ただし、『SHOAH』が暗示する「言葉にならない表情を写し続けること」を巡って、「未だ「歴史」になっていない現実が続いていること」と「表象された苦しみ」を超えた、「語り得ぬ苦しみ」への理解とそこから育まれる紐帯」という二つの側面から筆者の既報(三好 2025)にて論じたように、その際に私たちが忘れることなく眼差したいのは、「戦後」の長期間にわたり「語り得ないこと」や「語らないこと」を胸底に抱え続けつつも亡くなっていった一人ひとりの生存者から「伴走者」たちへ託されてきた「非戦」への祈りが、次第に貫かれるようにして「記憶の継承」という日常的営為が重ねられてきたことである。かつて社会学者の鶴見和子は、民俗学者の柳田国男の描いた常民の歴史に、中央集権型の日本近代史である「顕」の歴史と対比される「幽」の歴史(地方分権型日本近代史)を洞察しつつ、それは、現実の歴史過程において死者が希望しつつもなし得なかった過去の事業の積み重ねであると看破した(鶴見 1998: 111-112)。言い換えれば、「幽」の歴史とは、「死者の念として生者にうけつがれる情動または行動へのエネルギー」によって、未来において実現されるかもしれない「潜在的な可能性としての歴史」(前掲書: 112)である。

ウクライナやガザをはじめ今日の緊迫した世界情勢に目を向ける時、アジア・太平洋戦争終結から 80 年という長い歳月を通して戦争体験者たちが祈念し続けてきた、戦争が起こらず、核兵器のない世界の実現からは、残念ながら依然として大きな隔たりがあるように思われる。しかしながら、これまで各地の「伴走者」たちがその志に突き動か

されるようにして記憶の継承に日々力を尽くしてきたことに鑑みれば、次の世代である私たちが先人たちからの継承の力動に学び直しつつ、ささやかな日常の中でなしうることを更に模索し続けていくことが不可欠となるのは間違いない。そして、哲学者の鶴見俊輔が論じたように、そのためには「負けたことは忘れない、失敗したことは忘れない」という「間違いの記憶」²⁰(鶴見・関川 2015: 83)を一人ひとりの中で保ち続けていく重要性にも改めて向き合っていくべきである。

加えて、本研究において、「復帰」とベトナム戦争終結を経て変容する沖縄の現実と向き合った東松照明らや、福島で生を営み続ける結婚移民の中国人女性たちの軌跡から見えてくる更なる示唆として強調すべきは、それらがいずれも「戦後」の発展によって失われていく人びとの間の共同性であり、ひいては人間と自然との関わりを回復しようとする試みでもあったことである。つまり、筆者らも長崎や沖縄の現場から学んできたように、これまで既存研究において蓄積されてきた「戦争体験」の重みと同時に、いま、「戦後体験」の意味もまた丁寧に問い直していく必要があることを忘れてはならない。その際、東アジアにおける地域秩序の再編過程を念頭に置きながら、これらを常に複数の「戦後」という相のもとで重層的に捉え直していくべきことを忘却することなく、心に留めておきたい。例えば本稿の事例に即して言えば、激動する「復帰」を経験した沖縄において東松らが向き合った「戦後」には、沖縄戦、朝鮮戦争、ベトナム戦争などの幾重もの「戦後」が折り重なっており、また、中国東北部から福島への結婚移民の中国人女性たちが徐々に内省していった「戦後」には、日中戦争のみならず、中国における国共内戦も含意されていたからである。

とりわけ、以上の論点は、既存の個別安保体制論やアメリカによる世界戦略論、個別戦後史、文化史を超えて、東アジアにおける同時代性の中での人びとの「冷戦」の経験を諸領域の研究者らが共同しながら対話させていく必要性を唱えた、社会学者の道場親信による「冷戦の再審」という課題(道場 2021: 14)へと通底していくものと考えられる。すなわち、それは「東アジア」という広がりの中に経験をもう一度位置づけなおしていく作業」(前掲書: 12)であり、本研究からは、かつての戦争がもたらした傷跡のみならず、経済発展の影とも向き合う「伴走者」たちの思想的営為を凝視しつつ、沖縄や長崎、福島等の各地域史を再照射することにより、道場の論じた「閉域」や「単一民族国家」という表象には回収されず、さらには日米の「抱擁」関係(Dower 1999)をも相対化していく、東アジアとの密接な結びつきの中で形成されてきた「戦後史」が見えてきた。

ただし、その歴史は、敗戦後のきわめて厳しい生活の窮状から人びとが切実に希求し

²⁰「こういう間違いを自分がした。その記憶が自分の中にはっきりある。こういう間違いがあって、こういう間違いがある。いまでも間違いがあるだろう。その間違いは、いままでの間違い方からいってどういふものだろうかと推し量る。ゆっくり考えていけば、それがある方向を指している。それが真理の方向になる。(中略)だから真理を方向感覚と考える。その場合、間違いの記憶を保っていることが必要なんだ。」(鶴見・関川 2015: 82-83)

た復興や高度成長が各地にもたらした様々な矛盾であり、とりわけ地域間の非対称的な構造もまた戦前戦中からの連続性において捉え直していくべき必要性を投げかけていることにも留意したい。具体的には、それは東松らが直面した、復帰後も基地が残存し続けながらも急速に展開していった沖縄における開発や、3.11 後も今なお福島の上に暮らし続ける中国人女性たちの葛藤からも窺い知ることが出来る。

以上で述べてきた、人びとの生活の次元からのアジア地域史に対する複眼的な眼差しは、歴史学者のテッサ・モーリス＝スズキ(2014)が論じた東アジアの「歴史教科書論争」に象徴される「歴史の危機」、すなわち断片化された過去の特定のイメージに私たちが囚われることによって、異なる他者の過去やその現在の苦しみへの理解が断ち切られてしまうという危惧を私たちが克服していくことへ寄与すると考えられる。とりわけ、「歴史のさまざまな声に耳を傾けること」により過去についての自分の理解を形づくり、つくり直す「内省のプロセス」としての「歴史への真摯さ」こそが、直接的には経験していない過去の出来事に対し、いかに応答しうるかを現在の私たちに問いかけている「連累」²¹の重要性へと繋がるとする指摘²²(モーリス＝スズキ 2014: 306-319)は、「戦後 80 年」を経ても未だ困難であり続けている東アジアの歴史和解に向けて示唆に富んでおり、本研究の成果もこうした文脈に位置づけることが出来るのではないかと考えている。

このように、生身の人間が持つ現実としての過去の経験、そしてそれらがどのような形で身心に記憶として残されていくかについて受け止め、理解していく係わりの中で、私たちが引き受けるべき「記憶の継承」の意味が見えてくる。言い換えれば、過去を生きる人々が暮らしの中で感じてきた矛盾と葛藤を自分たちとは切り離されたものとして捉えるのではなく、そうした一人ひとりの人生の歴史の先に、いま、私たちが生きているこの社会的構造があるのだという「連続性」を改めて理解していくプロセスから、遠くない将来において必ずや到来する「ポスト体験時代」における記憶の継承が拓かれていくことを祈念しつつ、更なる展望を描いていきたい。

インプリケーション

²¹ 「私たちは過去の出来事に「連累」している。過去によって創られた制度、信念、組織のなかに生きているからである。しかし同時に、過去が私たちのなかに生きているからでもある。意識して、あるいは無意識のうちに、たくさんのメディアから吸収してきた歴史知識によって、誰に共感するか、現在のどの出来事に喜び、同情し、怒るのか、そうした出来事にどう対応するかが決定される。」(モーリス＝スズキ 2014: 309)

²² こうした考え方は、社会学者の有末賢が「ポスト体験時代」という時代背景と関連づけながら提唱した「球体としての記憶」という発想(有末 2016)と同調するものである。有末の論考では、記憶を、個人的記憶と集合的記憶、体験者と非体験者、メディアと事実情報という 3 つの次元で構成される座標軸の間に移動する球体に例え、記憶が単なる次元を超えた重層性と全体性を持つものとして強調されている。一方、社会学者の直野章子による、「事後的に設定された課題における「被爆体験」とは、被爆者自身にとっても過去の出来事であり、「記憶としての体験」である」ゆえに、「記憶が立ち現れる文脈、つまり、現在の記憶の枠組みによって影響を受け、出来事のただ中では生じていなかった感情や感覚が含まれることもある」という指摘(直野 2020)にも耳を傾ける必要がある。

謝辞

本研究は、公益財団法人 JFE21 世紀財団の 2024 年度「アジア歴史研究助成」による支援のもとで実現が叶ったことを衷心より御礼申し上げます。また、2025 年は「戦後 80 年」という節目を迎え多忙を極める中で、未来へ伝え継ぐべき大切な示唆を頂いた長崎城山小学校平和祈念館の山口政則氏、松尾眞一郎氏、滝川信一郎氏をはじめとする語り部の皆様、第 888 回平和祈念式・原爆殉難者慰霊式への参列にご尽力頂いた城山小学校の関係者の皆様に心より感謝致します。そして、沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」の恩河尚氏と伊敷勝美氏をはじめとする沖縄市史編集担当の皆様にも、資料調査へのご助言や沖縄市史に関するご案内、また戦争・戦後体験の継承に向けた議論など、お忙しい中で大変丁寧にご対応頂きました。記して深謝申し上げます。

分析資料(第 3 章)

- 北井一夫・平良孝七・藤原新也・石内都・岡井輝雄(1979),「座談会「私の原点」からどう翔ぶか」『アサヒカメラ』64(12),朝日新聞社,pp.228-231
- 平良孝七(1972),「開拓農民」『琉球新報』1972 年 8 月 31 日
- (1975a),「東松照明「太陽の鉛筆」に寄せて「沖縄に生きている」ことを呼び起こしてくれた」『カメラ毎日』1975 年 7 月号,毎日新聞社,p.226
- (1975b),『パイクカジ』私家版
- (1978),「沖縄にこだわるということ一ぼくと写真との係りの中で」『フォト眞』No.9,pp.19-23
- 東松照明(1969a),「日本国・沖縄県」『アサヒカメラ』54(7),朝日新聞社,pp.123-138,275-277
- (1969b),『OKINAWA 沖縄 OKINAWA—沖縄に基地があるのではなく基地の中に沖縄がある』写研
- (1972),「沖縄通信(上) 動きだした守礼の国の写真家たち」『アサヒカメラ』57(10),朝日新聞社,pp.173-176
- (1973),「シマの女」『Canon circle』No.155, 1973 年 5 月号,pp.3-8,39
- (1974a),「こだわりの旅」『終末から』1974 年 2 月号,筑摩書房,pp.97-105
- (1974b),「東松照明「太陽の鉛筆」を語る 1(聞き手＝西井一夫)」『カメラ毎日』1974 年 9 月号,毎日新聞社,pp.68-70
- (1975),『太陽の鉛筆—沖縄・海と空と島と人びと・そして東南アジアへ』毎日新聞社
- (1976),『朱もどろの華—沖縄日記』三省堂
- (1978),「A サイン(沖縄)」『世界』1978 年 10 月号,岩波書店,pp.1-16,272
- (1979a),『光る風—沖縄』集英社
- (1979b),「精緻きわめる写真と文—写真集「神々の島」に寄せて」『琉球新報』1979

年 8 月 8 日

—(1980),「連載《琉球列島》沖縄諸島(東シナ海)」『日本カメラ』1980 年 4 月号,日本カメラ社,pp.16-27,127

—(1983),「カメラのこと」『街頭の断想—アフォーリズム=80 年代へ』共同通信社,pp.98-99

東松照明・篠山紀信(1975),「対談「紀信快談」」『アサヒカメラ』60(7),朝日新聞社,pp.180-185

東松照明・比嘉康雄(1979),「祭りを記録することの意味—イザイホーをみて」『フォト真』10 号,pp.12-20

比嘉康雄(1971),『生れ島・沖縄』東京写真専門学院出版局

—(1972),「私の軌跡:6 比嘉康雄<沖縄>」『カメラ毎日』1972 年 7 月号,毎日新聞社

—(1973),「岩国にて(日本列島を見つめる<8>)」『沖縄タイムス』1973 年 3 月 19 日

—(1976),「『太陽賞』までの私の軌跡(上)」『琉球新報』1976 年 7 月 7 日

—(1980),「私の進路を決定した出会い」『谷川健一著作集 1(編集のしおり)』三一書房,pp.7-8

—(1982),「沖縄で写真を撮ること〜沖縄戦後写真詩展によせて〜」『琉球新報』1982 年 5 月 15 日

比嘉良治・比嘉康雄・平良孝七(1984),「なぜ写真を撮るのか—ウチナー写真家の視点—<上>」『琉球新報』1984 年 7 月 29 日

無署名(1975),「『太陽の鉛筆』—沖縄・海と空と島と人びと・そして東南アジアへ 東松照明著」『新沖縄文学』30 号,p.18

無署名(1977a),「『朱もどろの華—沖縄日記』 東松照明著」『新沖縄文学』34 号,p.135

無署名(1977b),「第二回木村伊兵衛賞授賞式開く 自分のペースでと『パイヌカジ』の平良孝七さん」『アサヒカメラ』1977 年 7 月号,朝日新聞社,pp.220-221

水島源晃(1992),「わたしの写真戦後史」,沖縄県写真協会創立 10 周年記念誌おきなわ写真の歩み編集委員会編『おきなわ写真の歩み』沖縄県写真協会,pp.16-18

山田實(1992),「沖縄写真界回顧」,前掲『おきなわ写真の歩み』沖縄県写真協会,pp.19-23

—(2012),『山田實が見た戦後沖縄』琉球新報社

山田實・仲里効・大城弘明・比嘉豊光(2003),「時代の旅人 写真史散策〜沖縄は何を記憶してきたか〜」<http://rca.open.ed.jp/city-2002/photo/2zadankai/index.html>
(2026 年 1 月 12 日最終アクセス)

引用参考文献

赤坂憲雄・鶴見和子(2015),『地域からつくる:内発的發展論と東北学』藤原書店

- 天野正子(1992),「民衆思想への方法的実験—「ひとびとの哲学」から「身上相談」への位相—」,安田常雄・天野正子編『戦後「啓蒙」思想の遺したもの』久山社, pp.107-129
- (1996),『「生活者」とはだれか—自律的市民像の系譜』中央公論社
- 蘭信三・小倉康嗣・今野日出晴編(2021),『なぜ戦争体験を継承するのか—ポスト体験時代の歴史実践』みずき書林
- 蘭信三(2021),「課題としての〈ポスト戦争体験の時代〉」,前掲『なぜ戦争体験を継承するのか—ポスト体験時代の歴史実践』みずき書林, pp.7-41
- 有末賢(2012),『生活史宣言—ライフヒストリーの社会学』慶応義塾大学出版会
- (2016),「集合的記憶と個人的記憶:記憶の共有性と忘却性をめぐって」,『法學研究:法律・政治・社会』89(2), pp.19-40
- 石田忠(1986),『原爆体験の思想化—反原爆論集Ⅰ』未来社
- 石原俊(2022),「戦後の終わり」にどう向き合うか」,『学術の動向』27(12), pp.46-49
- 今福龍太(2016),「カメラをもったディオゲネス:『新編 太陽の鉛筆』の編集を終えて」,『越境広場』2, pp.76-87
- 上野千鶴子(2022),「ポスト体験時代の戦争研究の課題」『学術の動向』27(12), pp.36-40
- 王石諾・三好恵真子(2022),「国際結婚で福島県に嫁いだ中国人女性の主体性とその形成過程—東日本大震災経験者のライフストーリーから読み解く—」,『アジア太平洋論叢』24(1), pp. 97-112
- (2023),「結婚移民として日中「二つの東北」を生きる中国人女性の歴史実践—ライフストーリーから読み解かれる「満洲」記憶—」,『生活学論叢』43, pp.28-42
- (2024),「日中「二つの東北」の痛みに向き合いながら生を営むという選択—「単位制」の弱体化や戦争の痕跡を受け止めつつ災害を乗り越えようとする結婚移住した中国人女性の歴史実践—」,『生活学論叢』45, pp.15-29
- (2025),「日中「二つの東北」を生きる結婚移民の女性たち—ライフストーリー法から拓かれていく「歴史実践」—」,『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』51, pp.1-26
- 大川史織編(2021),『なぜ戦争をえがくのか—戦争を知らない表現者たちの歴史実践』みずき書林
- 大城常夫(1977),「沖縄の過疎問題」,『地域学研究』8, pp.173-184
- 大野光明(2014),『沖縄闘争の時代 1960/70—分断を乗り越える思想と実践』人文書院
- 小熊英二(2002),『〈民主〉と〈愛国〉—戦後日本のナショナリズムと公共性』新曜社
- 小倉康嗣(2013),「被爆体験をめぐる調査表現とポジショナリティー—なんのために、どのように表現するのか」,浜日出夫・有末賢・竹村英樹編『被爆者調査を読む—ヒロシマ・ナガサキの継承』慶応義塾大学出版会, pp.207-254

- (2017),「参与する知を仕掛けていくパフォーマティブな調査表現—関わりの構築へ」,
『社会と調査』19, pp.44-55
- (2021),「「亡くなる記憶」をサバイブする—〈触れられない経験〉の積極性をめぐって—」,
浜日出夫編『サバイバーの社会学—喪のある景色を読み解く』ミネルヴァ書房, pp.47-104
- 金子隆一(2013),「沖縄写真史の位置：来たるべき東アジア写真史のために」,
『未来』556, 未来社, pp.27-30
- 北村毅(2009),『死者たちの戦後誌—沖縄戦跡をめぐる人びとの記憶』御茶の水書房
- 倉石信乃(2010),「解説 東松照明の「基地」について」, 東松照明(仲里効・倉石信乃監修)
『東松照明写真集 camp OKINAWA(沖縄写真家シリーズ琉球烈像第9巻)』未来社, pp.119-129
- (2013),「無名性の彼方—東松照明と後続の写真家たち」,
『「時の眼—沖縄」批評誌 N27』1, 新星出版, pp.74-79
- 古関彰一(2013),『「平和国家」日本の再検討』岩波書店
- 小原真史(2007),「「南島」へ／「南島」から(上)」,
『10+1』49, INAX 出版, pp.63-65
- (2008),「「南島」へ／「南島」から(下)」,
『10+1』50, INAX 出版, pp.39-43
- 今野日出晴(2021),「「戦争体験」、トラウマ、そして、平和博物館の「亡霊」」,
前掲『なぜ戦争体験を継承するのか—ポスト体験時代の歴史実践』みずき書林, pp.401-432
- 桜井哲夫(2007),『[増補] 可能性としての「戦後」—日本人は廃墟からどのように「自由」を追求したか』平凡社
- 佐藤健二(2001),『歴史社会学の作法：戦後社会科学批判』岩波書店
- 鈴木勝雄(2005),「方法としての「記録」—東松照明『太陽の鉛筆』と沖縄」,
『東京国立近代美術館研究紀要』10, pp.33-52
- 高山真(2016),『〈被爆者〉になる—変容する〈わたし〉のライフストーリー・インタビュー』せりか書房
- 多田治(2008),「観光リゾートとしての沖縄イメージの誕生：沖縄海洋博と開発の知」,
『一橋大学スポーツ研究』27, pp.61-66
- 田中雅一(2021),「開いた傷口に向き合う—アウシュヴィッツと犠牲者ナショナリズム」,
前掲『なぜ戦争体験を継承するのか—ポスト体験時代の歴史実践』みずき書林, pp.107-134
- 田仲康博(2010),『風景の裂け目—沖縄、占領の今』せりか書房
- 鶴見和子(1998),『鶴見和子曼茶羅4 土の巻 柳田国男論』藤原書店
- 鶴見俊輔・関川夏央(2015),『日本人は何を捨ててきたのか—思想家・鶴見俊輔の肉声』筑摩書房
- 戸邊秀明(2011),「沖縄「占領」からみた日本の「高度成長」」,
和田春樹ほか編『ベトナム戦争の時代：1960-1975 年(岩波講座東アジア近現代通史)』岩波書店, pp.242-

- 直野章子(2015),『原爆体験と戦後日本—記憶の形成と継承』岩波書店
- (2020),「当事者になる——体験の継承者から記憶の担い手へ——」,『生協協同組合研究』8, pp.18-25
- 仲里効(2009),『フォトネシア—眼の回帰線・沖縄』未来社
- (2012),「ゼロに萌える——無名への愛と鎮魂の詩学」,山田實(仲里効・倉石信乃監修)『山田實写真集 故郷は戦場だった(沖縄写真家シリーズ琉球烈像第1巻)』未来社, pp.145-152
- (2015),「比嘉康雄と東松照明—二人の写真家の＜沖縄＞」,吉見俊哉編『万博と沖縄返還—1970年前』岩波書店, pp.179-204
- 中谷碩岐・瀧口隆・吉成哲平編, 三好恵真子監修(2025),『出来事の記録と生の記憶 クロード・ランズマン『SHOAH』をみる』大阪大学中国文化フォーラム
- 中谷碩岐(2025),「出来事の記録と生の記憶——そのとき、なぜ『SHOAH』だったのか/いま、なぜ『SHOAH』なのか」, 前掲『出来事の記録と生の記憶 クロード・ランズマン『SHOAH』をみる』大阪大学中国文化フォーラム, pp. i-vi
- 中野敏男(2005),「東アジアで『戦後』を問うこと」,岩崎稔・大川正彦・李孝徳編『継続する植民地主義—ジェンダー／民族／人種／階級』青弓社, pp.12-21
- 中村江里(2022),「戦争体験に関わる「二次証言」の可能性と問題」,『日本オーラル・ヒストリー研究』18, pp.35-39
- 長崎の証言の会編(2023),「【資料】長崎原爆資料館改装についての要望書」,長崎の証言の会編『証言 2023—ナガサキ・ヒロシマの声(第37集)』汐文社, pp.20-39
- 成田龍一(2020),『増補「戦争経験」の戦後史—語られた体験/証言/記憶』岩波書店
- (2021),『危機の時代の歴史学のために』岩波書店
- 成田龍一・吉田裕編(2015),『記憶と認識の中のアジア・太平洋戦争』岩波書店
- 成田龍一・吉見俊哉(2005),「特集にあたって」,『思想』980, 岩波書店, pp.6-7
- 西川長夫・大野光明・番匠健一編(2014),『戦後史再考—「歴史の裂け目」をとらえる』平凡社
- 平井一臣(2020),『ベ平連とその時代—身ぶりとしての政治—』有志舎
- 福岡良明(2011),『焦土の記憶—沖縄・広島・長崎に映る戦後』新曜社
- (2020),『戦後日本、記憶の力学—「継承という断絶」と無難さの政治学』作品社
- 保莉実(2018),『ラディカル・オーラル・ヒストリー：オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』岩波書店
- 道場親信(2008),『抵抗の同時代史—軍事化とネオリベリズムに抗して』人文書院
- (2011),「ポスト・ベトナム戦争期におけるアジア連帯運動—「内なるアジア」と「アジアの中野日本」の間で」,前掲『ベトナム戦争の時代：1960-1975年(岩波講座東アジア近現代通史)』岩波書店, pp.97-12

- (2021),『新装版 占領と平和—〈戦後〉という経験』青土社
- 三好恵真子(2025),「監修者の言葉 「他者と出会うための「弛まぬ対話」——未だ「歴史」になっていない現実が続いていることへの理解を深めようとする営み」, 前掲『出来事の記録と生の記憶 クロード・ランズマン『SHOAH』をみる』, pp.213-222
- 三好恵真子・林礼釧・吉成哲平編(2023),『この 50 年の歩みを共に考える—それぞれの出来事をいま振り返る意味 (「21 世紀課題群と東アジアの新環境」シンポジウムシリーズ①)』OUFC Booklet Vol.17, 大阪大学中国文化フォーラム
- 三好恵真子・吉成哲平編(2024),『記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ (「21 世紀課題群と東アジアの新環境」シンポジウムシリーズ②)』OUFC Booklet Vol.18, 大阪大学中国文化フォーラム
- (2025),『ポスト体験時代の記憶の継承—アジア地域史の視座から祈念する私たちのダイアログ— (「21 世紀課題群と東アジアの新環境」シンポジウムシリーズ③)』OUFC Booklet Vol.19, 大阪大学中国文化フォーラム
- モーリス・スズキ・テッサ(2013),『批判的想像力のために—グローバル化時代の日本』平凡社
- (2014),『過去は死なない—メディア・記憶・歴史』岩波書店
- 屋嘉比収(2009),『沖縄戦、米軍占領史を学びなおす—記憶をいかに継承するか』世織書房
- 八木良広(2008),「被爆者の現実をいかに認識するか?—体験者と非体験者の間の境界線をめぐって」, 浜日出夫編『戦後日本における市民意識の形成—戦争体験の世代間継承』慶應義塾大学出版会, pp.159-186
- 山田朗(2020),「戦争の記憶をどう引き継ぐか—〈表の記憶〉と〈裏の記憶〉」,『生活協同組合研究』535, pp.42-49
- 油井大三郎(2020),「東アジアの地域協力と歴史和解の可能性」,『学術の動向』25(9), pp.10-13
- 吉田裕(2005),『日本人の戦争観—戦後史の中の変容』岩波書店
- 吉見俊哉(2007),『親米と反米—戦後日本の政治的無意識』岩波書店
- 吉見義明(1987=2022),『草の根のファシズム：日本民衆の戦争体験』岩波書店
- 吉成哲平・三好恵真子(2021),「戦争の影」を抱え展開し続ける「写真実践」—東松照明が生活の現場から証した、長崎の被爆者の生と死—,『生活学論叢』39, pp.15-30
- (2022),「写真家 東松照明が直面した「基地の中の沖縄」—日米の狭間で揺らぐ復帰前の現実と歴史への責任—」,『生活学論叢』41, pp.30-45

- (2023a), 「写真家たちが向き合った 1970 年前後の現実—「写真 100 年」展を通じた明治期以来の記録への内省—」, 『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』 49, pp.51-84
 - (2023b), 「「私性」から「公性」へと拓かれてゆく「写真実践」—復帰前後の沖縄での表現を巡る東松照明の模索—」, 『生活学論叢』 43, pp.43-57
 - (2024), 「「戦後」の生活者の思想を討究する「写真実践」の方法論的可能性—ひとびととの距離を埋めゆく東松照明の重層的経験の意味—」, 『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』 50, pp.185-213
 - (2025a), 「再帰的な撮影行為を介して拓かれていく「記憶の継承」の可能性—写真家たちが表現し続けた「戦後」を「写真実践」より問い直していく意味—」, 『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』 51, pp.45-73
 - (2025b), 「復帰後の沖縄の現実から問い直された「戦後」—写真家 東松照明が島々で確かめていった生活の実感—」, 『生活学論叢』 46, pp.15-29
 - (2026), 「沖縄を撮り続けた写真家たちの相互の触発とその距離—東松照明を軸に浮かび上がる島々でのそれぞれの内省—」, 『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』 52, 印刷中
- 米倉律(2018), 「「戦争体験・記憶」の継承をめぐるポリティクス: “戦後七〇年”関連テレビ番組の内容分析を中心に」, 『政経研究』 54(4), pp.469-497
- Dower, John. W. (1999), *Embracing Defeat: Japan in the Wake of World War II* (=2004 三浦陽一・高杉忠明・田代泰子訳『増補版 敗北を抱きしめて (上) (下)』岩波書店.)
- Gluck, Carol. (1993), “The Past in the Present” In *Postwar Japan as History*. Andrew Gordon, ed. 64-95. Berkeley: University of California Press. (キャロル・グラック (2001) (沢田博訳) 「現在のなかの過去」アンドルー・ゴードン編著 (中村政則訳) 『歴史としての戦後日本』みすず書房)
- Hashimoto, Akiko. (2015), *The Long Defeat: Cultural Trauma, Memory, and Identity in Japan*. (橋本明子 (2017) (山岡由美訳), 『日本の長い戦後—敗戦の記憶・トラウマはどう語り継がれているか』みすず書房)

附録：公益財団法人 JFE21 世紀財団 2024 年度「アジア歴史研究助成」による研究成果一覧

【書籍】

1. 中谷碩岐・瀧口隆・吉成哲平編、三好恵真子監修『出来事の記録と生の記憶 クロード・ランズマン『SHOAH』をみる』OUFC Booklet Vol.20, 2025 年 7 月,
<https://hdl.handle.net/11094/102323>
2. 三好恵真子・吉成哲平編『ポスト体験時代の記憶の継承—アジア地域史の視座から祈念する私たちのダイアログ—(「21 世紀課題群と東アジアの新環境」シンポジウムシリーズ③)』OUFC Booklet Vol.19, 2025 年 3 月,
<https://hdl.handle.net/11094/100627>

【論文】

1. 吉成哲平・三好恵真子(2026),「沖縄を撮り続けた写真家たちの相互の触発とその距離—東松照明を軸に浮かび上がる島々でのそれぞれの内省—」,『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』52, 印刷中
2. 冷昕媛・三好恵真子(2025),「中国社会転換期における環境 NGO の世代間継承と地域社会再構築への新たな展望—第 3 世代の環境 NGO リーダーのライフストーリーから読み解かれる実践での経験知—」,『生活学論叢』47, pp.1-16,
https://doi.org/10.24528/lifology.47.0_1
3. 三好恵真子・吉成哲平(2025),「「生活環境論」へのいざない〜「生活」を探求し、自然と共に生きる〜」,『生産と技術』Vol.77(No.4), pp.41-51,
<https://seisan.server-shared.com/774/774-42.pdf>
4. 吉成哲平・三好恵真子(2025),「復帰後の沖縄の現実から問い直された「戦後」—写真家 東松照明が島々で確かめていった生活の実感—」,『生活学論叢』46, pp.15-29
https://doi.org/10.24528/lifology.46.0_15
5. 王石諾・三好恵真子(2025),「日中「二つの東北」を生きる結婚移民の女性たち—ライフストーリー法から拓かれていく「歴史実践」—」,『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』51, pp.1-26, <https://doi.org/10.18910/100815>
6. 吉成哲平・三好恵真子(2025),「再帰的な撮影行為を介して拓かれていく「記憶の継承」の可能性—写真家たちが表現し続けた「戦後」を「写真実践」より問い直していく意味—」,『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』51, 45-73,
<https://doi.org/10.18910/100817>
7. Teppei Yoshinari, Emako Miyoshi.(2025), “Methodological Potential of “Photography in Practice (shashin-jissen)” Depicting the Thought of Common People in the “Postwar” Period: Importance of the layered experience of Shōmei

Tōmatsu deepening his understandings of the reality through photography”,
Osaka Human Sciences 11, pp.101-129

<https://doi.org/10.18910/100850>

8. Teppei Yoshinari, Emako Miyoshi.(2026), Preserving Memories of the Asia-Pacific War for Future Generations through Reflective Photography: Reexamining “postwar” Japan through “photography in practice (*shashin-jissen*)”, *Osaka Human Sciences* 12, in press

【学会発表】

1. 吉成哲平・三好恵真子「沖縄を撮り続けた写真家たちの相互の触発とその距離—東松照明を軸に浮かび上がる島々でのそれぞれの内省—」第 28 回社会文化学会全国大会, 2025 年 12 月
2. 朝木日力格「外側から構築される内モンゴルを問い直す—狭間を生きる内モンゴル出身モンゴル人の対話的オートエスノグラフィ」日本現代中国学会関西西部会大会 2025 年度大会, 2025 年 11 月
3. 吉成哲平・三好恵真子「東アジアへ拓かれていく長崎の生活者たちの歴史：写真家東松照明が捉え直していった被爆の現実」日本オーラル・ヒストリー学会第 23 回大会, 2025 年 9 月
4. 王石諾・三好恵真子「日中「二つの東北」を生きる中国人女性の移動をめぐる歴史実践—戦争の痕跡を受け止めつつ震災を乗り越えようとする一人ひとりのライフストーリー—」日本生活学会第 52 回大会ラウンドテーブル B「大会開催地特別テーマ「災害被災地の復興に生活学は何ができるか」」2025 年 6 月
5. 吉成哲平・三好恵真子「写真家 東松照明らが表現し続けた生活者の思想的営為—「写真実践」より拓かれていく見過ごされてきた「戦後」の暮らしとその重み—」日本生活学会第 52 回大会ラウンドテーブル A「いま‘生活学’はいかに可能か」2025 年 6 月

【写真展】

1. 「記憶の継承ラボ」写真展 「「戦後」の生活者の思想的営為の記憶とその現在」(2025 年 7 月 28 日(月)～30 日(水)) (主催：大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター・IMPACT オープンプロジェクト「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ」(記憶の継承ラボ)、大阪大学人間科学研究科環境行動学研究分野)